

# 辞書は作り手の顔が表示された野菜のように

ぬまの みつよし  
沼野 充義

東京大学教授。ロシア・東欧文学者。日本を含む現代世界文学全般も研究対象としている。著書に『W文学の世紀へ 境界を越える日本語文学』（五柳書院）など。

外国文学を専門とする大学教師という商売柄、辞書や事典とのつきあいはおそらく人一倍多いだろう。金のない学生時代は高価な外国の辞典はなかなか手が届かず、悔しい思いをしたが、いまでは買いそろえるくらいの資金はないことはないが（別荘や外車などを買える身分ではとうていないけれども）、今度は狭い我が家に置く場所がない。

というわけで、わが人生と切っても切れない縁がある辞書とのつきあいは、正直なところ、辛いものではあったが、同時にこれほど楽しいものもないということとを強調しておきたい。外国語に携わる人間にとって辞書とは、第一に、知らない単語の意味を確かめるための道具だが、そのうちに辞書を読むことそのものか、思いがけない発見をもたらす快楽になる。さらに年を取ってくると、知っていたはずの単語の意味があいまいになってくるので（外国語だけでなく、日本語の場

合も同様である）、辞書を引いて、「へえ、正確にはそういう意味だったのか、でも自分の用法とはちよつと違うなあ」といった感想を抱くこともよくあるが、辞書編纂者と自分の語感の微妙なずれもまた楽しみの源になる。もちろん辞書を作った偉い先生のほうが正しくて、一介の言語使用者である自分が間違っていることが多いのだが、歴史的・社会的な共有物であるはずの言葉について、どうして自分が間違った使い方をするようになったのか、考えることは面白い。そして、ときどき、間違っているのは自分ではなく、ひよつとしたら辞書を作った先生のほうが言葉の現状から「ずれている」のではないか、と思ひ当たることもある。

こんなことを書くと、国語教育に日々苦勞されている先生方には迷惑かもしれないのだが、どんな辞典といえども百パーセント正しいなどということはあり得ない。言葉は変幻自在、日々変わっていく生き物であ

るのに対して、辞書編纂はその変化のスピードに追いつけないからだ。特に語感といった次元のことになると、辞書を編纂する通例かなり年配の先生が、世の中からかなりずれてしまっていることは当然のことだろう。

もっとも、私は、辞書編纂者が世の若者言葉にもおねるべきだなどと言いたいわけではない。むしろ頑固親父に徹し、新しい流行の言い方など断固拒否することこそが、辞書編纂者の存在意義ではないかと思う。

例えば、中村明氏は画期的な『日本語 語感の辞典』（岩波書店、二〇一〇）で、「可愛い」という単語の現代的な用法に触れて、「センチ、可愛い」「あのお爺さん、可愛い」といった使いかたには「違和感を覚える」と、批判的な姿勢を示しているが、中村氏自身が若い女子学生にそう言われて目を白黒させている様子を思い描くと、なにやら可笑しくもある。北原保雄氏編の世評の高い（私も愛用している）『明鏡国語辞典 第二版』（大修館書店、二〇一〇）を見ると「先生ってば、てれちゃって、かわいい」という用例が載っていて、「俗語」という「位相」が記されている。

しかし、「俗語」も長く使われ、社会の大部分が違和感なく受け入れるようになると、もはや俗語ではなくなる。辞書がそのプロセスをわざわざ促進する必要

はないだろう。生きた言葉とは、辞書のおかげで公認されるというよりは、「辞書にもかかわらず」命を更新していくものだからだ。最近、大学院の演習で、「真逆」という言葉を平気で使う若手研究者がいたので、気になって指摘したら、「どこがおかしいんですか？」と真顔で聞き返されてしまった。そこで、その場には十人くらいの大学院生全員に聞いたところ、「真逆」に抵抗があると答えたのは一名だけだった。私もまた世の中から遅れているのだ、と自覚せざるを得ない年になってしまったようだ。ちなみに「真逆」については、山田忠雄他編『新明解国語辞典 第七版』（三省堂、二〇一二）は「口頭語」、われらが『明鏡』は「俗語」と記している。辞書の編纂者とは、無農薬でいい野菜を作り続けようとする頑固な農家の主のようなものだ。私たちは作り手の顔を思い描き、世間で広く流通している安物とはひと味違うなあと思ひながら、こだわりの野菜を味わえばよい。

そう、そう、先ほど、うっかり「頑固親父」と書いてしまったが、辞書編纂の中心は男で当然だという常識もそろそろ見直さなければならぬだろう。女性の語感を活かしたら、従来のものとはまったく違う斬新な辞典ができるに違いないと私は期待している。

# 夫婦円満にも役立ってます

お  
つ  
か  
大塚 ひかり

古典エッセイスト。著書に『源氏物語』全訳六巻（ちくま文庫）など多数。最新刊は『古事記 いのちと勇気の湧く神話』（中公新書ラクレ）。

一九六一年生まれの私にとって、分からないことがあるとまず聞くのは紙の辞書。ネットの情報は速報性があるが、辞書には紙の辞書。ネットの情報は速報性があるが、辞書には紙の辞書。ネットの情報は速報性があるが、辞書には紙の辞書。

なかでも思い出深いのは、『日本国語大辞典』が出た時からほしかったのですが、大学一年の頃、少し廉価の縮刷版が出たので、親に全十巻買ってもらったこと。手に入れた時は本当に嬉しくて、物心ついて以来、ずっと古典オタクだった私は、古典にそえられることばを見つけると、すぐに引いたものです。運動もしないのに、私にわりあい腕力があるのは、これらの重い辞書を毎日、本棚から出したりしまったり、動かしていたからかも。辞書で筋トレしていたわけです。

それは冗談として、当時、『宇治拾遺物語』の芋粥の話に出てくる「とりばみ」という、正月の宮中での

饗宴で、人々の余り物を食べる存在が気になっていた。さつそくその辞書で引いてみると、そこには意味と共に『枕草子』や『小右記』の別の例、『今昔物語集』の類話の事例がちゃんと載っていた。私は専攻は日本史なのですが、それを足がかりに興味を広がって、卒論では「とりばみ」の歴史的・民俗学的意義を追究することにしました。

この辞書は人生の折々で役立っていて、結婚後は、新潟県の糸魚川出身の夫から聞き馴れないことばが出るとすぐに調べてます。「さつこと」があった時は心底感動しました。「さつこと」というのは「さつこと」「早く」「とつと」というような意味で、夫の郷里では「さつこと」と濁らず発音するんですが、そのバージョンも載っていた。まさかこんなローカルなことばが……と、そこから夫婦の会話も弾みました。

紙の辞書の楽しみは、目的のことばや概念だけでなく、ページを繰るだけで、予想外の知識を得られることにもある。『源氏物語』を全訳した際、難儀だったのは、今では使われないさまざまな色や、襲の色目の名称が出てくることでした。それで色の辞典を活用した。赤系統だけでも、朱、茜、紅、紅梅、今様、桜、躑躅、蘇芳……と色の名前と色が次々、目に飛び込んでくるので、仕事を忘れて見とれたものです。

また、着物を重ね着する時の「襲の色目」は、何色と何色を組み合わせるかについて諸説あって、たとえば「桜」という色目は辞書によってまるで違う。そうした違いを、複数の辞書を並べて比較しつつ、『源氏物語』の文脈に当てはめて、

「この場合、どっちがふさわしい色目かな？」と想像するのも、仕事抜きに楽しく贅沢な作業でした。想像力をかきたてられるのは紙の辞書のいいところ。年中行事辞典などをばつと開いて、「ちゃんこ」「ことこと」などといった見馴れない、けれど気になることばの意味を調べつつ、昔の人の暮らしを想像してばんやりするのも昔から私の息抜きです。

息抜きと言えば、二年前から書道を習い始めたんで

ですが、私にとってのいちばんのネックは書き順。「式」とか「即」とか、ごく簡単な字の書き順を間違えて覚えていたことに気がついた。これはもう書道の先生にそのつど聞くしかない諦めていたら、最近入手した『新漢語林』には書き順が載っていて感動しました。引いた書き順は鉛筆で、二度三度と間違えた場合は赤鉛筆で印をつけ、体で覚えるようにしています。

そんなふうに「書きこめる」。私にとってこれこそ紙の辞書の最大の魅力。数十年前前に引いた赤線や書きこみを見ると、

「あの頃はこういうことに興味を持っていたんだなあ。こんなことも知らなかったのか」などと、我が身の歴史を見るようで、我ながら楽しいのです。冒頭で紹介した辞書の「とりばみ」にもしつかり線が引いてあって、それを見ると、毎日のように図書館通いして、卒論を仕上げた暑い夏の日々や、当時好きだった人のことまで心に浮かんできます。

使いこんでカバーが取れたり、ところどころ自分で補修した辞書は、思い出がいっぱい詰まっています。手垢のにおいも愛おしい。陳腐な言い方になりますが、私の宝物です。

# 自分で選べる先生 それが、国語辞典！

サンキュータツオ

漫才コンビ・米粒写経としてテレビやラジオなどで活躍中。早稲田大学大学院を経て、現在、一橋大学の非常勤講師も務める。国語科の教員免許を所持。

まずは、あなたの持っている国語辞典の「恋愛」という項目をひいてほしい。そこにはなんて書いてあるだろう？

【岩波国語辞典 第七版】「名・ス自」 男女間の、恋しいたう愛情。こい。「―結婚」

【新明解国語辞典 第七版】―する（自サ）特定の異性に對して他の全てを犠牲にしても悔い無いと思ひ込むような愛情をいだき、常に相手のことを思つては、二人だけではない、二人だけの世界を分かち合いたいと願ひ、それがかなえられたと言つては喜び、ちよつとでも疑念が生じれば不安になるといつた状態に身を置くこと。「熱烈な―の末に結ばれた二人／―結婚・―小説・―至上主義」

【明鏡国語辞典 第二版】「名・自サ変」 異性同士（まれに同性同士）が互いに恋ひ慕ふこと。また、その感情。

岩波さんと新明解くんでのこの記述の分量の違いはどうだ。決して長い記述だから良いというわけではない。しかし、新明解では、日常的に使用する言葉には、なるべくそのニュアンスを伝えようという姿勢が感じられる。「他の全てを犠牲にしても悔い無いと思ひ込むような」というあたり、新明解くん、なんか重い。そして「思ひ込む」というあたりに、恋愛とは所詮思ひ込みなのかもしれない、なんていう諦念も匂わせる。いいことばかりではなく、喜んだり不安になったりするものだという恋愛観がそこにある。

日常的に知っている言葉だからわざわざ引いたことはないかもしれないが、この項目ひとつとっても、各辞典で考え方がまるで違うのはおわかりだろうか？

岩波くんは、そういう個人的な思ひ入れは出さずに、「僕が言うべきなのはあくまで一般論だから」と、クールだ。彼は口数が多いほうではない。主観的な記述ではなく、国語辞典は客観的な記述をすべきだという姿勢がそこにはある。ここに、もし自分の意見を通して曲がつた恋愛観を持たれてはいけない、と自制をき

かせる恋愛観がある。岩波くんはここ百年の日本語を視野に入れていたので、時代に踊らされない。明鏡くんは「まれに同性同士」という記述をわざわざ入れてあるあたりにリベラルな立場であることを表明している。漫画やアニメなどに出てくる同性愛的なものもこの記述に表現しているのだろうか、時代をつかもうという姿勢がある。

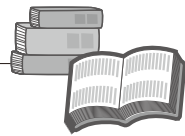
こうした違いは偶然ではない。どの辞書も意図的にやっている。

「ねえねえ先生、恋愛ってなあに？」そう聞かれたら「そうだな、恋愛っていうのはな……」と、教える情報は人それぞれだろう。情熱をこめて教える先生もいれば、いや、教師はあまり踏み込まず、一般論を教えるべきだと思つてゐる先生もいる。リベラルな先生は同性愛にも触れてくれる。それとおなじだ。

どの辞書も、教えようとしていることは言葉の情報である。意味、品詞、活用、ニュアンス、アクセント、漢字、どういうときに使うのか、大事な言葉なのか、類語はなにか。できれば教えてやりたいことはたくさんある。しかし、どの先生も決められたカリキュラムのなかで単元を組み立てなければならぬように、ど

どの教科の先生でも、教え方が人それぞれなのは、だれもが知っている。教材はおなじでも、しゃべり方、どこを重点的に教えるのか、受験のためなのか、真の学力をつけるのか、で、全然教え方が変わってくる。また、人によっては、学校の先生と塾の先生、両方に教わる生徒もいる。

国語辞典もおなじである。辞書は、生徒が「自分で選べる先生」なのだ。だからこそ、自分に合う一冊、できれば目的別に二冊持つていてもいい。辞書を選ぶ楽しみを、先生や生徒さんたちに知ってもらえたら、私はとてもうれしい！



# 言葉との縁をむすぶ

## 『明鏡国語辞典』の活用法

やざわ まこと  
矢澤 真人

『明鏡国語辞典』編集委員  
筑波大学教授

### ■言葉の正しさと「相場」を知るために

「明鏡」は「明るいかみ」の意ですが、その「かがみ」には「鑑」と「鏡」があると編者の北原保雄先生はおっしゃっています。「鑑」は手本・模範の意で、言葉の正しさ、基準。一方の「鏡」は実際の姿を映すもの。「〇〇時代に使われた」「語源はこうである」という正しさ・定点を知るとともに、いま自分が使っている言葉はどういう位置にあるのか、これからどう動くのかという相場を読んでいく。国語辞典はその両方に応えるものでありたい、ということだと思います。第二版では私も、サ変動詞や「な／＼」の問題、例えば「／＼を復活する／＼を復活させる」「異例の／＼異例な」のどちらが現在は優勢で、そしてどちらが標準的表現なのかといった解説を担当しました。

### ■日本語の束を実感する

人や時代によって「社会に相応しい言葉」は変わりますが、何年後かに社会に出る子供たちに、相場を読んでその社会の中で相応しい言葉を選ぶという「生きる力」を身につけさせる。その道具の一つとして、『明鏡国語辞典』をぜひ使っていただきたい。『明鏡』は、正しい定点の部分と、現状の相場を伝えるところがうまく融合された国語辞典だと思っています。

「日本語ってどんなものだろう」ということを、生徒は教科書などで知識として学ぶことはあっても、自分ではなかなか調査はできません。けれど国語辞典を使うといろんなことが実感できるだろうと思います。私もよくやるのが「国語辞典の真ん中の言葉は何？」というもの。だいたいみんな五十音順

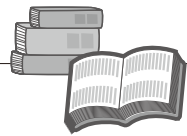
の真ん中が「ぬ」だと予想をつけますが、紙の国語辞典で真ん中のページをぱっと開くと、小型の国語辞典は「せ」のあたりなんです。『広辞苑』など中型の辞典になると「す」になります。

辞書では、五十音の真ん中の「ぬ」がどうして後ろのほうになっているのか、「ぬ」の前のどんな語が多く紙面をとっているのか、と疑問が出てくるでしょう。国語辞典を見ると、「あ」はこれくらい、といったそれぞれの言葉の束が見えてきます。すると「し」が多いことがわかる。「し」を見ていくと、どうも漢字からなる熟語、漢語がたくさん並んでいるようだということに気づくでしょう。

そうすると次に、全体の中で「し」に漢語が多いことを説明したくなるでしょう。そこで使えるのが、教科書の後ろにある常用漢字表の音訓表。『明鏡』第二版にも巻末にありますね。この音訓表は音の順に並んでいるんです。ざっと数えると、音が「か行」「さ行」である漢字がやたらに多いことがわかる。そうすると、常用漢字の中で「か行」「さ行」になり漢語が多そうだ、ということが見えてくる。常用漢字表という、全然違う資料がここでむすびついてくるのも生徒にはおもしろいかもしれません。「こ

れが常用漢字だよ」と言われて眺めている表と、「語彙を調べよ」と言われている辞書と、ばらばらに見ていたものが、そこでくっついて、一つの「ぼー」とか「へー」とかいいうことが生まれる。

また、辞書を「か行」の中で見てみると、「く」「け」が明らかに少ない。常用漢字表に戻ると音が「く」の漢字が少ないことがわかります。ウ段音で始まる漢字は少ないのです。一方、「け」の方は古語辞典を参照してもいいのですが、和語ではエ段が少くない。これは「え」が、母音の中で最もあとに生まれたという歴史が影響しているな、と。そのあたりは中高生には難しいところかもしれませんが、まずは辞書を指で繰ったりページを数えたりすることで、こんなに簡単に日本語の語彙の様子、「日本語ってそんなふうになってるんだ」という実感を体感できる。まさに辞書でもって日本語を体感するのです。机の上にある辞書を眺めていて、「し」が多いなということに気づいている生徒はいるかもしれませんが。その何となく気づいていることを、国語の授業で「なぜだと思う？」と、他の人にもわかる客観的な証拠をあげる形にすると、言葉の世界が広がってくる。国語辞典はそういうところでも使ってもらえるので



はないでしょうか。

### ■国語の教材に出てくる言葉

紙の辞書にしろ電子辞書にしろ、「今この意味が知りたい」「今この言い方が正しいのか知りたい」と便利さを求める場面と、学校で国語の学習の中で使う場面とは、国語辞典のあり方は異なるのではないかと感じています。

国語の教科書に即した形で、ある教材に出てくる言葉を、その教材の中での意味がわかるように国語辞典で解説することは必要でしょう。『明鏡』も第二版で、『舞姫』『山月記』などに出てくる言葉を増補しました。けれど、その教材だけで意味がわかれればいいかというと、そうではないでしょう。教材を使って言葉を調べるというのは、これをきっかけにして言葉の世界に触れるということではないでしょうか。辞典を引いて言葉にはいろんな意味があることを知るといことが、国語教育のなかで重要なことだと思います。この教材に必要な、「今知りたいこと」を伝えるということと、それだけじゃなくて余計なことも知らせたいという、その教育のせめぎ合いの中で国語辞典も成り立っているのだと思います。

です。特に第二版では解説を大幅に増やして、さらにその解説にたどり着くための「明鏡 問題なことば索引」を作りました。「怒りを買う」は適切な表現で「批判を買う」は適切でないのはなぜかと、「おめでとうございました」の「た」がどうして不自然なのか、といった話題をまとめた索引です。索引に示してあるページにいくと、辞典の中でそれを解説しているところにたどり着ける。この索引をきっかけに、いろいろな言葉の話題に出会えるようになっていきます。

「批判を買う」は、『問題な日本語 その4』で私が担当したのですが、北原先生編著の『問題な日本語』ももう四冊になりました。執筆陣が『明鏡』の編者と編集委員です。『問題な日本語』四巻分を取り上げた話題が、『明鏡』第二版にはたくさん入っています。「怒りを買う」とか「批判を受ける」が言えて、どうして「批判を買う」が言えないのか、これは調査をするとなると高校生には結構大変ですよ。国語教育では、「これは正しい、これは正しくない」と答えを出さなくちゃいけないこともあるけれども、それだけではなくて、言葉との縁をむすぶということも大切な役割としてあるのではないで

す。

生徒は教科書に出てきた言葉はすべて理解し、使えるようにならなくてはいいかなと思っています。もしれないですけど、実はそんなことはないですね。中島敦の『山月記』には、自分はその後の人生で一度も会わなかった、国語の教科書で一回しか出会わなかったという言葉があるかもしれない。それは教養として意味あるものなのですが、高校生には自分が生きていくなかで、それが実際に使われる実用的な言葉なのか、そうでないのかわからない。教科書だけではそのあたりの用途が立ちにくい。そういう時、国語辞典を引いてみると、例えば『明鏡』では現代の日常的な語彙ではない漢語には「文語」という意味で「文」と打っています。『明鏡』に「文」とある言葉は、「これは教養部門の言葉だな」と自分の中の言葉のリストに入れておく。国語辞典からそういうヒントを得て、自分と言葉との関わり方を測るといこともできると思います。

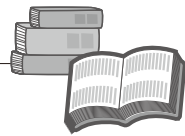
### ■言葉との縁をむすぶ——「明鏡 問題なことば索引」

『明鏡』の特色は、**表現** **語法** **表記** **注意**などの欄で、言葉の使い方をたくさん解説していること

でしょうか。

高校生が教科書で『源氏物語』に触れて、一度縁をむすんでおくと、それがきっかけとなって大人になつてからでも「読んでみようか」ということがあります。言葉に関しても、国語辞典でちよつとでも縁をむすぶ——。「縁」っていうのは、袖振り合うも多生の縁って言いますけども、ずっと通り過ぎるのではなくて、通りすがりの作品や言葉とちよつと会話を交わしておく。するとそれは、のちの言葉の生活につながっていくはず。辞書というのは言葉と縁をむすぶその「きっかけ作り」のところにあるので、高校時代にできるだけ辞書を引いてほしいという気持ちがあります。わからない言葉や漢字の「意味」や「表記」だけではなく、それ以外のところもぜひ読んでほしいですね。『明鏡』には**表現**とか**語法**とか、そういう引っかけりを作るような情報がいっぱい入っていますから、この索引を入り口にして言葉との縁をむすんでくれたら、と切に思います。

(二〇一二年七月談・聞き手、編集部)



# 『明鏡国語辞典』で語彙を増やす

おしき かずこ  
押木 和子

新潟県立新潟江南高等学校教諭

## 一 嘆くより育てよう

授業から戻った教員が「最近の生徒は言葉を知らない」とこぼすことがよくある。私自身も生徒が教科書に出てくる慣用語やことわざの言葉の意味をあまりに知らなくて驚く。そうかと思うと、彼らは私たちの知らない略語や片仮名の専門用語を滑らかに使う。様々な生活環境の変化、インターネットやメディアの発達の中で、子どもたちの接する言葉や使える語彙が確実に変化しているのだ。私たちは、生徒の語彙の少なさを嘆くのではなく、彼らが公の場での言語活動に不自由しないように、必要な語彙を増やす手立てを講じるべきだろう。生徒たちの言葉に対する感受性や興味は私たちが育てていくものだ。彼らが自由自在に使える言葉を自分の中に貯めていくために何ができるだろう。

## 二 作業から知的習慣へ

これまでも、新入生には『明鏡国語辞典』の購入を勧め、辞書を引くことを推奨してきた。新しい教材に入る前には語句調べを宿題にしたり、授業中に一斉に辞書引きをさせたりしている。しかしそれだけでは足りない。辞書を引くことが単に作業で終わっているからだ。私が違和感を感じるのは、生徒たちが言葉を知らないことよりむしろ、意味のわからない語に出会っても、平気で放っておけるところだ。辞書を引かずにはおれない衝動を味わわせるにはどうしたらよいだろうか。辞書引き作業を知的好奇心からの習慣に変える工夫を日々考えている。

私は生徒との対話にヒントがあるように感じている。特に評論用語や比喩的に使われている語は、書き手の意図や文脈によって意味が微妙に変わって

る。辞書を片手に生徒と対話しながら文章を読み、本文中での語の意味を吟味していけたらと思う。

## 三 評論教材「水の東西」での試み

そのささやかな試みとして、評論文からやや難解な表現を含む何箇所かの文に注目し、辞書を引きながら、わかりやすい文に書き換える練習を行った。

(1) 対象学年・科目 一年生「国語総合」

(2) 教材 「水の東西」山崎正和

(3) 課題 次の文を、特に傍線部の語に注意して難しい言葉はわかりやすく言い換え、筆者が何を言いたいのか説明しなさい。

例えば次のような箇所を取り上げてみた。

「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、そういう思想はむしろ思想以前の感性によって裏付けられていた。

たいていの生徒は注に説明されているにも関わらず、無意識のうちに「行雲流水」を辞書で引き、続いて「感性」を調べる。それぞれの語を機械的に辞書の記述に置き換えて一文にまとめようとする。その後の生徒との対話を再現してみたい。

授業者 「行雲流水のどこが仏教的なの？」

生徒 「成り行きに身をまかせるところです。」

授業者 「では、思想以前の感性って何？」

生徒 「思想」を辞書で引き「思考作用の結果得られる

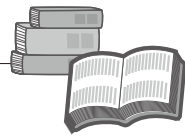
考えの前に、直感的に感じることです。」

授業者 「ここでは思想と感性という言葉はどういう関係にあるの？」

生徒 「対比されています。そうか。『行雲流水』は頭で考える思考でなく感性によって生まれたということを言いたいのか。」  
こうして生徒は次のようにまとめた。

「物事にこだわらず成り行きに身をゆだねる」という意味の「行雲流水」という仏教的な言葉があるが、この言葉は、日本人が思考作用によって生み出す前に、直観的に感じ取って生まれた言葉である。

この練習を通して、語彙を増やすには、辞書をもくもくと引くだけでなく生徒同士、あるいは教員と対話することが有効だと痛感した。対話が辞書引きを促し、有機的な理解を進めるのではないかと考えている。



## ことばの鏡

ながい よしこ  
永井佳子  
東京都立葛西南高等学校主幹教諭

いま、子どもたちの「語彙力」あるいは「ことばに対する姿勢」という面で、特に気になっていることがあります。それは、

- ①意味の分からない言葉が出てきても素通りする。
- ②辞書を引いても、そこに書かれている言葉の意味が分からない。
- ③たとえ言葉の意味が理解できたとしても、それを使いこなせない。

このような子どもたちの実態を目の当たりにして、徹底することばと向き合わせたいと考え、日常的に次のような方法で語彙学習を行なっています。

- ①教科書・漢字帳・教科書準拠のワークや問題集などあらゆる学習材において、その紙面の中で意味のあやふやな語句は全て色ペンでチェックし、素通りしない。（語彙力には個人差があるので、生徒が挙げたものの中で「これだけは」

というもののみ全員で確認する。その他のものについては自主学习で行う。）

- ②意味調べをした際、辞書中の語句で意味の分からないものがある場合は、さらにその語を調べてみる。また、辞書をそのまま書き写すだけでなく、時には自分の理解できる語に置き換えて簡潔にまとめる練習をする。
- ③意味だけでなく必ず用法を確認する。辞書の例文に加えて、自分の日常的に使う語として短文を作成してみる。

このような学習の中で、最近特に有効だと思ったのは、意味の分かりにくい語句に出会った際、即辞書に頼るのではなく、一度必ず自分で推測したものをワークシート等に記入させ、その横に辞書の意味を記させるというものです。生徒たちの中で「A（推測がほぼ正解）」「B（推測の一部が正解）」「C（推測が不正解）」という具合に三段階に分けて記す方法が

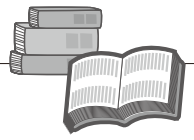
あみだされ、私もこのやり方を奨励しています。ただひたすら辞書を引くよりも、いったん推測することばでクイズの答え合わせのように辞書を引く楽しみが増し、また、生徒自身の語彙力を測ることも出来るので一石二鳥というわけです。

授業以外では、自宅学習としての課題のほかに、検定取得のための学習において辞書を活用しています。本校では、数年前から資格・検定取得に力を入れており、その一つとして「日本漢字能力検定」や「日本語検定」を受検する生徒が多くいます。その学習の過程で、実際に語句の意味が問われる問題でなくても、あえて意味を確認することで、漢字の書き取りや読み等が覚えやすくなった、という生徒の感想をよく耳にします。そして、このような取り組みが功を奏したのか、今春卒業した生徒の八十%以上が先に記した国語（ことば）に関する検定に合格しています。

つまり本校では、「ごく当たり前ではあるけれども基本的な語彙学習を、授業内外で継続的に取り入れていくこと」を常に念頭に置いた指導を行なっています。限られた五十分という授業の中で、毎回辞書

を引かせるのは、それなりに手間や負担もかかるのですが、やはり辞書を手に取らせる時間を惜しんでは語彙力をつけることはできないと考えます。そして、この語彙学習において本校が推奨している辞書が『明鏡国語辞典』なのです。『明鏡国語辞典』が特に優れていると思われるのは、他の辞書に比べて例文が豊富であること、読み応えのあるコラムや私たちの言語生活を反映した比較的新しい語を多く採録しているところではないでしょうか。また、付録の『明鏡問題なことば索引』は大変興味深く、これをどうやって授業に取り入れていこうかと、今その有効活用について模索しているところです。さらに「明鏡国語辞典を上手に使う」という副題で『敬語とことばの使い方問題集』が発行されていますが、その解説は「辞書を引いてみましょう」ということで、模範解答の欄に『明鏡国語辞典』のページ数が記されています。これは辞書とコラボレーションした問題集として大変秀逸なものとなっています。

優れた辞書は他にもたくさんあるのかもしれませんが、まさに「ことばの鏡」になりうるほどに、辞書の方から学習者に寄り添ってくれているのが『明鏡国語辞典』だといえるでしょう。



# 辞書を身近な存在に

かみむら  
上村 剛

北海道土幌高等学校国語科教諭

高校生の辞書離れにますます拍車がかかっている。書きたい漢字が出てこなかったり、言葉の意味がわからなかったりすれば、すぐにパソコンや携帯電話で調べてしまう。重たい辞書を身近において調べようとは思わない。当然、高校生にとってはその方が便利で楽だからだ。

これは情報化社会がもたらした、大きな弊害の一つである。しかしながら、このようにして得た知識はなかなか身につかない。苦勞して得た知識こそがしっかりと身についていくものだと私は考える。

そこで、本校では高校生達に辞書を少しでも身近な存在に感じてもらうために、授業中に「辞書引き」の機会を設けている。全員同じ教材を使った方がよりよい授業ができるため、高校生

学を機に全員同じ辞書を購入してもらっている。昨年度から本校では『明鏡国語辞典』を教材として使っている。

本校の「国語総合」の授業では、全体音読やグループ討議、小説の場面再現など生徒が活動する機会を多く取り入れているが、「辞書引き」はその中の一つとして取り入れている。その日の授業で扱う新出語句を授業の導入段階で黒板に列挙し、時間を決めて一斉に調べさせる。すべての語句を調べ終わった生徒は挙手し確認印をもらうのである。

これを数時間続けると、それまで辞書を引くことにとまどいを感じていた生徒達も進んで活動するようになる。意味が複数ある語句についても、用例豊富な『明鏡』で辞書引きに慣れると、その文章の中でどの意味が一番適切なのか的確に判断できるようになる。定期考査で語句の意味を問う問題の正答率も以前より上がってきているので、調べた内容が知識としてしっかりと身についているのがわかる。

また、「辞書引き」以外の時間でも、読解の授業の中で文章中の語句がどんな意味であるかと発問すると、生徒達は自発的に辞書ですばやく調べて発言するようになる。こういった自発的な活動こそ、まさに生徒達が辞書を身近に感じ、活用する第一歩だと思ふのである。

現在、辞書を授業の中で積極的に活用する取り組みは「国語総合」で行っているが、表現分野などでも大いに活かそうである。こういった取り組みが生徒達にとって効果的な活動になるのか、今後模索していきたい。

# 「羅生門」の語彙と 辞書指導

なかむら だいすけ  
中村 太祐

長野県中野立志館高等学校教諭

羅生門の末尾の初出形「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ、強盗を働きに急ぎつつあった」の「雨を冒す」を生徒は案外読めない。「障害になるものに逆らって、あえて物事をする」(明鏡第二版)を引き、「冒・犯・侵」の使い分け(新漢語林の同音異義一覧も重宝する)を確認し、下人が盗人として廻り所を得て勇んでいる様子と、「誰も知らない」の闇の中に消えていく突き放した感じの表現の印象の違いを確認する。

ついで、なぜ門の名が、羅城門でなく「羅生門」なのか。謡曲「羅生門」はおき、舞台設定が皆《境界》を示していたことを踏まえ、ここは漢字から考えてみようと思をかける。「羅」の会意「あみ・つらなるの意味を表す」(新漢語林)を調べた生徒から「生(と死)」につながる境界線上の物語「なんだあ、と納得した声が上がってくる」。

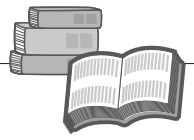
最後に芥川自身が「恋愛問題の影響で独りになると気が沈ん

だから：なる可く愉快な小説が書きたかった」と語っているんだと紹介する。羅生門の一体どこが愉快？ と生徒の反応は鈍い。

現実の恋愛と異なり、語り手の思うがままに読者の鼻先を引きずり回す。そんな作者の暗い喜びにこそ愉快がある、と私は思うんだ、と構わず続ける。

「二人の男が、様子をうかがっていた」と別人の登場を疑わせ↓「下人」、異常な死体損壊を思わせる「死骸の首に両手をはけると」↓「髪の毛を一本ずつ抜き始めた」、一筋縄ではない老婆をイメージさせる「肉食鳥のように鋭い目」↓「あえぎあえぎ」など、わざと読者をミスリードしてスリルを高めては、はぐらかす技法が繰り返されているよね。

特に印象的なのは、下人が「鼻を覆うことを忘れていた」という箇所。その理由を作者は「ある強い感情がほとんどことごとくこの男の臭覚を奪ってしまったからである」と感情の高ぶりのためと説明している。しかし芥川は観客の視線を思うまま誘導する言葉の魔術師ぶりを發揮して、ひそかに暗い笑みを浮かべていたに違いない。息をするのも忘れていた」と書き足し、呼吸を止めていた下人が、臭覚を感じないのは当然！と、感情とはむしろ無関係だと暗示しているのだ、と補足する。初めて私がここに気が付いた時の十年以上前のあの、「やられた！」という感覚を共有してくれるせいか、この話は生徒の反応が良い。ちなみに「太刀」を鞘走らないようにしなければならぬ理由、明鏡で納得しました。皆さんもご確認ください。



# 辞書活用についての一案

たむら こういち  
田村 浩一

香蘭女学校中等科・高等科教諭

言葉の知識を増やすことを目的として辞書を引かせる授業に、ずっと首を傾げていた。本当にそうなのだろうか、と。

中等科一年生の授業を担当すると、まず私は国語辞典(『明鏡』)と漢和辞典を机上に用意させる(決して電子辞書ではない)。そして、簡単に両辞書の使い方を説明したり確認したりした後、漢字二字熟語しりとりクイズの問題(オリジナル)を配布する。またその時、前後左右の席の数人のグループに分けて、机を向い合せに付けるよう指示する。教室に六つのグループができる。そして、これからの作業は一人でやらずに、グループ全員で相談してクイズを解くようにアドバイスを与える。

このクイズは、例えば中→校→園というような二字熟語のしりとり問題になっていて(右の例の答えはそれぞれ例えば学、庭)、そのしりとりが左右にも上下にも矢印で網の目のように伸びて行く。大人が解いてもかなりの難問である。

このクイズの良いところは、漢和辞典と国語辞典の両方を上手に駆使すると解けるということ。また、漢和辞典も、単に文字を探すのみでなく、その文字が下接するものとして列挙されている熟語を調べることも多々必要になってくる。つまり、このクイズを解いているうちに、辞書の種々の機能を自然と、しかも自分たちの力で発見することができるようになるのである。グループ全員で相談することも大切な要素である。一人でこの作業ができる生徒ばかりとは限らない。理解の遅い生徒も当然何人も教室にはいる。その生徒たちは、グループ内の友だちに相談することもできる。また、知恵の働くグループでは、分担して辞書を引いたりする場合もある。この授業ではそれもOKにしている。開いている辞書の頁で脇道に逸れて何かを発見して喜んでいるグループもある。それもOKである。

大切なことは、自分たちで相談しながら、いろいろな発見をしてゆくことにある。そうすることによって、一人一人の力で、グループ内の各人が自分の取り柄を生かして、そして最終的にはグループみんなの総力で、ことばの意味や、未知のことばの存在や、ことばや漢字の面白さや、辞書の新しい活用のしかたなどを発見し、その喜びを共有するのである。同時に、この過程の中で友人を発見し、自分を発見する喜びまでも共有するのである。この喜びは、知識獲得の喜びではない。取えて言えば、辞書「経験」による「知恵」発見を「共有」した喜びである。

学校教育の本質は経験による知恵共有にあるろう。国語の授業での辞書活用は、その本質にそくした方法で行われた方がよい。

# 国語科なんでも



## Q 古典の重複教材をうまく扱うには？

学習指導要領の改訂で小学校から古典に触れる機会が増えました。その中には『枕草子』『徒然草』等の教材が含まれています。生徒はおおよその内容は理解しているため、文法中心の授業になりそうです。このような教材で、生徒の興味・関心を持続させる方法はないでしょうか。

群馬県・27才女性、他

## A 西<sup>にし</sup>一夫<sup>かずお</sup>

信州大学教授

ここでは三校種の複数教科書で取り上げられている『枕草子』の「春はあけぼの」を取り上げてみます。学習目標を整理すると次の通りです。

小学校…声に出して本文を読む。口語訳から情景が浮かぶ場面を指摘する。

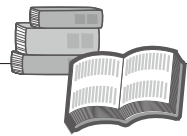
中学校…作者の四季に対する見方や感じ方に触れる。自分の季節感と比べる。

高等学校…作者が感じる四季の時間や景物について整理する。自然の捉え方について、作者と自分の感じ方を比べる。

目標は三点に集約されます（傍線部参照）。中学校と高等学校に重複が認められますが、高等学校では中学校での指導の上に立って「深める」ことが求められています。つまり、教材内容をある程度理解していることを前提にした学習と位置づけられます。その際、文法事項がより深い教材理解に必要であるとの説明を忘れてはなりません。

まず微視的な視点で内容を捉え直して再整理する活動が有効でしょう。その一つに、どの感覚で季節毎の内容を捉えているのかがあります。具体的には、夏の前半では「月」「螢」は視覚で捉え、最後の「雨」は、聴覚に基づく表現である点を指摘できるだけでも理解に深まりが出ます。同様な傾向は「秋」にも指摘できます。また、「春」「冬」でも複数の感覚を併用して描写されています。次に対象が自然物なのか人事なのかという点も見逃せません。章段全体が春から冬への展開を描くのにあわせて、自然物から人事に移行している事実気付ける姿勢が大切です。これは偶然ではなく、続く章段が十二ヶ月の変化を述べる内容であることに関わります。つまり、先人が季節を知る方法には、自然の変化に着目した理解と「暦」での理解とがあったのです。加えて季節の変化を知るきっかけを生徒達の生活から確認する作業があれば、先人との関係を見直すことになるでしょう。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。質問は小社「国語教室Q&A係」まで。



# みんなで作った国語辞典

## ——キャンペーンを振り返って

審査委員長

きたはらやすお  
北原保雄

『明鏡国語辞典』編者、元筑波大学学長、筑波大学名誉教授

このキャンペーンの目的の一つは、若い人たちに、自分で言葉を探ってきてその意味を定義し、用例を当てる、そういう練習、訓練をしてもらうことにありました。言葉を定義するということは簡単なことではありませんが、言葉を選定し、定義することに挑戦しているうちに、言葉の意味の深さがわかり、言葉を大切にする心も育つのではないかと思ったのです。

寄せられた多くの作品はいきいきとしていて、若い人たちの言葉への関心には私も驚き、また嬉しく思いました。回を重ねるごとに、学校ぐるみ、教室ぐるみの参加が増え、先生方の指導のもとで、定義や解説の上手な作品が増えていきました。講演などで現場の先生にお会いすると、「うちの学校は学校賞を受賞しました。楽しみに参加しています」など

二〇〇五年から小社で行ってきた『もっと明鏡』大賞みんなで作る国語辞典！キャンペーンは、この第六回をもって一旦お休みすることになりました。先生方のご指導、ご協力に深く感謝申し上げ、審査委員長 北原保雄先生の言葉と、貴重な成果の一端をご報告いたします。

と何回も声を掛けられましたし、校長室に額入りの賞状が掲げられているのを何度も見ました。この場を借りて、指導された先生方に御礼申し上げます。

「みんなで国語辞典」の成果の一部は、『みんなで国語辞典！』『あふれる新語』辞書に載らない日本語の三冊にまとまりました。それは本当にごく一部であり、その向こうには、高校生・中学生の皆さんが一つ一つ考えて応募してくれた四十三万を超える作品があります。キャンペーンに参加してくださった先生方、生徒の皆さんとの共同作品であり、まさに「みんなで」作った国語辞典でした。

今後も、学校の教室における学習で、また日常生活の中で、言葉の発掘、定義の実践が続けられることを期待いたします。長い間、ありがとうございました。

あみがい【網買い】 インターネットで

買い物すること。「昨日、本と洋服を網買いした」【語源】 ネット＝網で品物を買うことから。（熊本県・県立

玉名高校・角町華子・第4回）

エアライン その場の雰囲気に入るこ

と。「あの女の子たちのグループにはエアラインしにくい」（東京都・日本大学豊山女子高校・呉佳奈保・第6回）  
エゴカー 自分勝手な運転をする迷惑な車。または、ドライバー。「ここらへんはよくエゴカーが出る」（北海道・旭川工業高等専門学校・船橋勇那・第5回）

おとメン【乙男】乙女心をもっている

男のこと。かわいい物や料理、裁縫などが好きな男のこと。メイクの得意な「化粧師系オトメン」、お花の手入れが得意な「お花好きオトメン」などがある。◆男らしさも兼ね備えていなくてはならない。（東京都・昭和第一学園高校・鳥海宏貴・第3回）  
こあくま【小悪魔】会話やしぐさに異性を惑わせる要素を含ませ、夢中に

させる人のこと。「魔性」より陽性

で、計画的・作画的である。「あの子は小悪魔だ」（奈良県・智辯学園高校・山本真未・第1回）

ツンデレ ①普段は無関心を装う、嫌

悪感を示す等の突き放した態度を取っているが、二人きりになると素直になる、というように外面と内面にギャップがあること。前述の状態を「ツンツン」とし、後述の状態を「デレデレ」とした上での状態変化を指す。②上記のような態度を取る女性の通称。（山形県・県立寒河江工業高校・木村健吾・第1回）

てきでん【適電】適切な節電のこと。

エアコンを使わないで熱中症になるのではなく、無理をせず、しかし節電すること。「今日は、気温が三五・七度だから、エアコンをつけて適電しよう」（東京都・早稲田大学高等学院 中学部・加藤理仁・第6回）  
べしやむ ①ささいなことが理由で少し落ち込む。「昨日嫌な事あったから今日はべしやむ」②なんとなく元氣

がなくなる。「今日は何かべしやんだ気分」◆おもに会話の中で使われ、

他人が落ち込んでいる時には、「べしやんでる？」と聞くこともある。（福島県・県立福島明成高校・阿部里菜・第2回）

もぎもぎ 緊張や不安でドキドキして

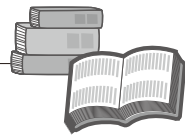
いる時に、体をもじもじ動かしてしまふさま。◆ドキドキともじもじが一緒になった状態。（神奈川県・県立横浜清陵総合高校・小川菜摘・第4回）

ゆびこい【指恋】好きな人と携帯でメ

ールをすること。相手に自分の思いを伝えようとする。【語源】 親指で文字を打つことから。（兵庫県・県立姫路南高校・石田汀・第3回）

ろくおん【録音】①音をテープレコー

ダーなどに記録し、必要なときに再生できるようにすること。②女性がトイレに行くことを遠回しにいう言い方。「ちよつと録音に行ってくる」◆「録音↓音入れ↓おといれ↓おトイレ」となった。（愛媛大学農学部附属農業高校・牟田早織・第2回）



# 辞書作り授業の楽しさ

おくむら じゅんこ  
奥村 準子

筑波大学附属坂戸高等学校教諭

## 1 失われる「高校生の辞書文化」

電子辞書の普及により、私たちが学生時代に親しんだ「ささやかな辞書の楽しみ」は消えつつある。たとえば古語辞典を使った意味調べに飽きてくると、巻末の付録をめくってはマニアックな有職故実を見付けて仲間にも自慢したり、英和辞典をどれくらい使い込んでいるかを自慢するために、辞書の小口（書物の背の反対側の裁断面）の手垢の濃さを友人と比べ合ったりする類のものだ。

今やインターネットと電子辞書の時代。最短距離でめざす言葉の意味を探し出す効率は上がったが、その分「寄り道の楽しみ」が失われた。豊かな語彙の担い手として子どもたちを育てるために、今あらためて「紙の重み」が必要なのではないだろうか。

## 2 「紙の辞書」の魅力

本校生徒の八割以上は電子辞書を所有し、使い方も心得ている。しかし電子辞書の弱点は、基本的に「検索する語句の情報だけ」を検出する点にある。バラバラとページをめくりながら新しい言葉との出会いを楽しみ、コラムや付録を利用して語彙を豊かにしていく学習は、高等学校学習指導要領の国語科目標にある「言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め」ることにつながるのではないだろうか。

本校の「国語総合」の授業では、「紙の」古語辞典・漢和辞典を授業時に貸し出し、生徒に辞書の引き方を説明しているが、国語辞典についてはこれまで効果的な学習材として活用する機会をつくってこなかった。今回の学習活動を機に、さらに効果的な国語辞典の利用方法を考えていきたいと思う。

## 3 単元「筑坂辞典をつくろう」

夏の学校説明会で本校受験を希望する中学生に対して学校紹介をするために、校内でよく使われるキーワードの説明を考えさせる授業（全二時間）を考えた。指導事項は、学習指導要領「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の「イ 言葉の特徴やきまりに関する事項」「（イ）文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること。」に即して単元を構成した。教材は『明鏡国語辞典第二版』と『みんなで国語辞典！』（「もっと明鏡」委員会編二〇〇六年）の二点を用い、活動状況の観察、ワークシートの内容等から評価をおこなった。

### ①導入

言葉の正確な説明の必要性を実感するために、『明鏡国語辞典』の別冊「明鏡 問題なことが索引」から五つの例題を示し、正解を辞書で調べさせた。

【例題（抜粋）】正しいのはどちら？

1 A 最高の努力をしたとしても、上には

上があるものだ。

B 最高の努力をしたとしても、上には上があるものだ。（正解はA）

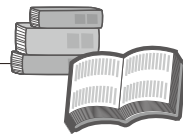
2 テスト結果を見て「因果応報」とは、A 的を射た表現だね。（正解はA）

B 的を得た表現だね。

慣用句の子見出しまで丁寧に読む習慣のない生徒は、「正しい答えを見つけれ」作業に多少手間取っていた。また、わずかな違いが「誤用」となることに對して驚きの声をあげる生徒も見られた。

### ②コラムに触れる

①の作業の進みが早かった生徒には、辞書のコラム欄を読ませてみた。既習の教材「しろい春」（吉原幸子の詩、大修館書店『国語総合 改訂版』より）で「白」という語から受けるイメージを考えさせたが、辞書ではどのように説明しているのかを確認させた。『明鏡国語辞典』のコラム「白のイメージと表現」（八六三頁）には、九項の表現が紹介され、生徒たちは、ひとつの語が持つ豊かなイメージを知る契機となった。



### ③クイズ問題作成

第二の作業は、一九九三年にフジテレビ系列で放映された深夜番組「たはいや」（本来の意味は「イノシシを追うための小屋」、欧米でFictionaryと呼ばれる辞書を利用したゲーム）を参考に、「皆が知らないような言葉を探して四択問題作成」を試みた。先に例題を示し、同様の問題を作成、皆で問題を解き合ってみた。

（例題）名詞で「雪隠詰め」とは何のこと？

- A 雪合戦で負けること
- B 便所に押し込められること
- C 逃げ場のない状況へ追いつめること
- D 「雪隠の詰め合わせ」の略

「雪隠」はもと禪宗の語で「便所・かわや」を指すが、将棋の世界では「相手の王将を盤の隅に追い込んで詰めること」から、選択肢Cが正解である。既習の「未来を切り開く力」（羽生善治の随想教材、同右で、もとは将棋の用語が一般的に使われるようになった例（局面）など）の一つとして紹介した。選択肢の作り方については、思いつくのが難しい場合は、三択・二択でも可とした。

作問の際に留意させたのは、問題文に必ず「品詞」を入れることである。ちょうど古典文法の学習が本格的に始まり、用言の活用について四苦八苦している時期でもあったため、辞書を引くときに品詞に注目させて、少しでも文法用語に馴染ませようとした。一年生三七名が作問し、動詞三名、形容詞二名、形容動詞二名、連語を取り上げた者が三名、残り二七名はすべて名詞を使って作問した。

取り上げる語の重複を避けるため「自分の誕生日のページ数から語を探してみよう」という条件を付けたこともあり、作問に苦労する生徒も見られたが、問題を解く段階になると、「この問題誰が作ったの？」と声を上げながら楽しむ様子も見られた。問題を解く際は、時間の都合により教師が作問をとりまとめてプリントし、一斉に解答させる形でおこなった。時間にゆとりがあれば、グループで問題を出す形をとると盛り上がったのではないかと思う。実際の作問をいくつか紹介したい。（※生徒へ出題の際、紙面の都合で表現を要約したものもある。）

問1 言い落とし（名）とは？

A 異性へのくどき文句

名中二八名が紹介とその説明文を挙げたい。

#### 【コミキャン】（名）

（例1）コミュニケーション・キャンプのこと。一年次の最初の大行事。同学年の人や、同じクラスの人たちとうちとけたり、総合学科について学んだり、大自然にふれたりするのが目的。（例2）新一年次生を対象に、入学式翌日から三泊四日長野県黒姫高原で行われるキャンプ。筑坂の生活を知ることと仲間を作ることが目的。（例3）コミュニケーションキャンプの略。入学したばかりの生徒たちが、交流を深め、仲良くなるためのキャンプ。マウンテンバイクや、森の散さくなどを行う。三泊四日。

### ④「筑坂辞典」をつくる

前述の参考資料『みんなで国語辞典！』をもとに、校内でよく聞こえてくる言葉の説明を課題として考えさせた。入学してわずか三ヶ月の一年生に考えさせるには校内での生活時間が短すぎたため、同じ用語を挙げる生徒が目立ち、学校説明会で紹介するまでの多様性は見られなかったが、最多登場の語（三九

問1は「落とす」の意味を「くどく・白状させる・出てこない」など変化に富む選択肢を考えた点を評価したい。問2は、導入で考えさせた「問題なことば」をふまえ、同音異義語の説明を試みた点が評価できるだろう。

- B 相手を白状させること
  - C 言葉が出てこないこと
  - D 言い忘れること（正解はD）
- 問2 「起こす」と「興す」（動）の違いは？
- A 物事を盛んにするのが「起こす」
  - B 非日常的なものを「起こす」、日常的なものを「興す」
  - C Bの逆
  - D Aの逆（正解はD）

### ⑤まとめ

例1は総合学科の学びについて、例2は行き先、例3は内容について紹介がある点を評価した。

例文や補注などを書かせるなどの工夫があれば、より魅力的な「筑坂辞典」ができたのではないかと思う。今後も工夫を重ねていきたい。

高校生にとって漢和辞典は難しいものという印象があるかもしれません。『新漢語林』の改訂作業にご尽力いただいたお二人の先生に、漢和辞典がより身近になる授業での活用方法や、漢和辞典の今とこれからについて伺いました。

むこうじま しげよし  
向嶋 成美  
たかの ゆきお  
高野 由紀夫  
(聞き手＝編集部)

★授業の導入に漢和辞典を

日常で漢和辞典を開く機会はあまり多くないようですが、どうすればもっと親しんでもらえるでしょうか。

身近な題材で興味を引く

向嶋 ◆私は大学で漢文学概論という授業を担当した際、自分の名前について、図書館のありとあらゆる漢和辞典を調べてききたい、というレポートを課しました。名前というのは、親御さんが君たちに対していろんな思いを抱いてつけたものだから、できる限り調べてきなさい、と。学生も面白がっていろいろと調べてきて、まじめな学生は本当によく調べ、考えてきていましたので、けっこう成功した課題だったと思っています。

字あれば、日常的にこれで足りないことはまずありませんから、漢字についての知識は十分に得られると思います。――親字数・熟語数が多い多すぎても、実際には使わないような項目がどんどん増えています。

高野 ◆あるいは、数が多ければ多いほど中身が薄くなっていくということかもしれませんね(笑)。「史記」だって、異なり字数で五千字ぐらいしかないでしょう。

向嶋 ◆そんなものでしょうね。

高野 ◆しかも数えてみると、使用頻度百位以内の字が全体の文字数の半分近くを占めています。つまり百字で「史記」の半分ができているんですね。だから、親字がいっぱい入っているかというよりも、親字の説明が充実しているかを第一に、活用するのに便利な工夫がされているかどうかが重要だと思います。

向嶋 ◆そうですね。漢字は非常に造語力の強い文字ですから、熟語にしてもいくらかもあるんです。「大漢和」ほど

高野 ◆高校一年生の入門期の漢文を担当していたときは、漢和辞典に関する話から始めることにしていました。最初は「これが5万字」(のポスター)と『大漢和辞典』の第十二巻を持っていきまして、画数の多い漢字の話から始めるんです。漢字がいくつあるか、その中で一番画数の多い漢字は何画だろうかというようなことから、龍四つの「テッ」の話をして、漢和辞典の話になる。この『大漢和』は十五分の一巻で、全部だと大変な量になるので、みんなが買うとしたら、これこれの辞典があったて……と、普通の辞典の話始めるわけです。ただ、漢字が五万ほどしかないっていうことが、生徒たちにはすごく意外なようです。

の大きな辞書でも、あらゆる言葉を網羅するのは不可能に近い。そうすると学習辞典の場合は、親字数・熟語数が多ければいいというものではないだろうと思います。一番重要なところをきちんと説明してある辞書、それがやはり、望まれる辞書ではないでしょうか。――まずは「意訓索引」を活用する

向嶋 ◆今の大学生たちは、紙の辞書よりも、電子辞書が多いですね。授業に漢和辞典を持ってくるようにシラバスにも書いてあるんですけれども、紙の辞書を持つてくる学生は皆無に近い。

高野 ◆私は以前、高校三年生の選択授業を担当していて、「史記」などを読んでいたんです。生徒八人ぐらいで、週に二時間。授業の場所が国語の資料室だったものだから、漢和辞典がたくさん積んである。そこから適当なのをそれぞれに持たせて、最初の三十分は本文を自習させます。「後で順番に読

向嶋 ◆僕も授業で同じ質問をしたことがあります。むしろ、一万字だとか二万字と答える学生が多かった。

高野 ◆五万字が紙一枚に収まっているからね。見せるとびっくりして、少ないと感じるのでしょうか。漢文の授業で扱う漢字は、三千から四千だろうと思うのですが、そのうち常用漢字が二千百あるわけですから、つまり漢文に必要なのは、プラス千とか、千数百。その千数百を嫌がる風潮があるけれども、英単語は二千ぐらいは高校生は確実に覚えるでしょう。五万字のポスターから、漢字がどれぐらい数があるって、我々はそのうちどれぐらいマスターしなければいけないか、目標にすべきかというような話につながるんです。

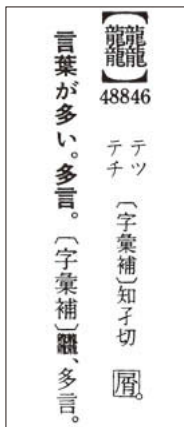
――漢字の数といえば、『新漢語林 第三版』は親字数一四、六二九です。

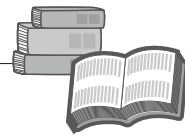
向嶋 ◆一万四千という数はほとんどこれで十分でしょう。『大漢和』は五万字ですけども、その中には一生に一度お目にかかるかどうかという文字が相当数含まれています。一万四千



↑「これが5万字」ポスター(部分)  
『大漢和辞典』に収録されている親字5万294字をB全判1枚に収めたポスター。四色刷。  
大修館書店編集部編、1,260円

→『大漢和辞典』で最も画数が多い字は64画で、2字ある。そのうちの1字がこの「テツ」。(『大漢和』12巻より)





高野由紀夫（たかの ゆきお）  
元日本女子大学附属高等学校教諭。  
大修館書店教科書編集委員。『新漢  
語林 第二版』では、助字・句法  
解説を中心に担当。



向嶋成美（むこうじま しげよし）  
筑波大学名誉教授。大修館書店教  
科書編集委員。『新漢語林 第二  
版』では、親字の増補・改訂を中  
心に担当。

んでもらうよ」と言っておくと、一生懸命辞書を引きますね。自分が普段から使っている電子辞書の漢和辞典と紙の漢和辞典と引きあう競争もしていました。紙は紙で結構使っていましたよ。

——生徒が紙の辞書の引き方で困るようなことはありませんでしたか。

高野◆困りはしませんね、だいたい音訓索引。

向嶋◆そうですね、やはり…。

高野◆今、部首索引で引かせるのは、なかなか難しい。ただ、この字がどうしてこの部首に入っているかというような話は、授業の中で雑談として触れることはできます。それができるのは紙の辞書ですね。開くとどの辞書でも

部首の一覧表がトップにありますので。雑談の中でも、部首との接点を多く作らないといけないと思います。

——音訓索引は引き方が単純ですが、慣れれば部首引きのほうが便利ですね。

高野◆そうですね、歴史的な事情があつて、部首で編集されていますからね。でも私としては、とにかく音訓から引いてもらいたい、と。何十回も引いているうちに、明らかに部首のイメージができてきたら、どういう部首があつて、どの部首がどのあたりにある、と発見していくようになると思うんです。億劫がらずに引く習慣が身につけばいいですね。そのためには、音訓索引をさらに使いやすくなる工夫も必要かもしれません。音の場合には同音が多いですから。

——結局画数を数えないといけません。

向嶋◆訓で引くほうがはるかに楽ですが、まずその字の訓を知っているかということが問題となります。

——引くのある程度の教養が必要とされます。

んべん」に入っています。つまり使う人がとまどいそうな部首に関して、探しやすいように配置が整理されている。

——昔の漢和辞典に比べると、相当親切に、進化しています。

高野◆大昔の漢和辞典だったら、用例なんてなくて、出典のタイトルを書いてあるだけでした。それがどんどん広がって、使いやすくなっています。

用例にも工夫が

——用例の話ですと、『新漢語林』ではもともと返り点読み・現代語訳をすべてにつけている、いわゆる「全訳」です。第二版ではさらに、用例数を大幅に増やしました。

向嶋◆用例の多くは、高校の漢文の教科書にあるものを取り上げられています

高野◆それは漢和辞典の本質ですね。

### ★進化する漢和辞典

現在の漢和辞典は、様々な点で使いやすい工夫がなされています。

引きやすさを追求

——電子辞書では、手書き入力で引けるのが普通になっています。

高野◆先ほどの音訓索引の話と同じで、仮に手書き入力から入ったとしても、興味を持てば、本来どう作られて、どうやって使われてきたかという道に近づいていくでしょう。そう考えれば、入り口はいくらでも広く用意しておくべきだと思います。その工夫としては、たとえば『新漢語林』の部首の立て方、『康熙字典』と違いますね。

向嶋◆違いますね。

高野◆私が高校時代に使っていた『新漢和辞典』は、『大漢和辞典』と同じ部首立てでしたから、『新漢語林』を使い始めたときに、え、どうしてこの部首ここにあるのって（笑）。たとえば「ぎようがまえ」の字はすべて「ぎように

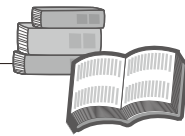
にも載っていない、「厳友」「温友」といった言葉があるそうですが、これを載せるべきかというところ……。

高野◆「厳友」と書いてあつたら、説明するまでもなく「厳しい友」だとわかります（笑）。

向嶋◆ただ、親字からの類推だけではなかなかつかめない熟語というのがあります。たとえば「登時」という言葉。「即時」とほとんど同じ意味ですが、「登」と「時」という字からは、すぐさま、という意味はなかなかわかりません。こういったものは熟語として掲げることが絶対必要だと思います。しかし本来はやはり親字の解説が重要です。この『新漢語林』は、重要な親字については、かなり丁寧な説明をしてありますから、高校生だけではなく、一般の方々にも十分使っていただけの辞書になっていると思います。

——ありがとうございます。

（二〇二二年七月一七日 大修館書店会議室）



# クラス漢和辞典を作ろう！

おかもととしあき  
岡本利昭

神戸大学附属中等教育学校教諭

「漢和辞典を使う時はいつか」と問われると、読み方や意味が分からない難しい字を引く時のように考えがちだ。だが、私は小学校低学年の児童でも知っている「易しい」字こそ、漢和辞典で調べるべきだと考えている。なぜなら、過去のセンター試験や東京大学入試漢文など、小学校で習う「平易かつ常用」の漢字の意味を問うてきているからである。

例えば、「中」という漢字は小学校で学習する平易な字と考えがちだ。だが、「中毒」という熟語で「中」が「あたる」という意味で使われているということ、を理解している人は、どれくらいいるだろう（百発百中の「中」も同じ）。一見簡単そうだが、よく意味まで考えると大人でも答えるのが難しい漢字の語義について、センター試験は問うてきているのだ。

また、東大入試では今年、「同」の意味を知らなければ答えられない解釈問題を出題していたが、や

はり「見境もなく仲間になる」という意味が「同」という漢字にあることを知っていて、雷同という熟語として使われていることをこれまた、どれぐらいの受験生が意識して答えられたのだろう。昨年は「道」、「言う」という意味の報道の「道」が、また平成十九年は「謝」、「あやまる、礼を言う」という意味ではなく、「ことわる」という意味の謝絶の「謝」が、十八年は賭博の「博」が出題されている。

以上のような問題意識から、生徒一人一人に漢和辞典（『新漢語林』大修館書店）を渡して、小学校で学ぶ教育漢字千六字の中から任意の三字と自分の姓名に使われている漢字一字の計四字を抜き出させ、それぞれ漢音・呉音・唐宋音・慣用音などの別を示させた後、『新漢語林』に記載されている字義をまとめて、自分の漢和辞典を作らせることにした。『新漢語林』では、常用漢字は親字が、人名漢字は親字

を囲む括弧が、それぞれ赤で印刷されているので一目で対象となる字を生徒が識別しやすかった。計三時間の実践だったが、一字一ページで一人四字ずつだから、最終的には百六十ページのクラス漢和辞典ができあがった。

こういう取り組みは、今までも諸賢によって様々に実践されているが、今回は調べた字義を使って、センター試験風に問題を生徒各人に作らせた点特徴である。与えられたテキストをまとめ（編集し）、その情報を利用する（問題を作る）という点ではPISA型学力育成型実践でもある。

問題を作らせる際、対象となる漢字は小学校低学年で習う基本的な漢字であればあるほど望ましいと感じた。例えばある生徒は「白」を親字とし、漢音「ハク」と呉音「ビヤク」を調べ、字義を形容詞・動詞・名詞に分けたあと、動詞の意味に「語る・つづける」があることを見つけて記載している。その上で、

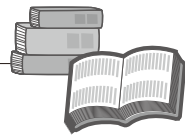
次の①から④のなかで、他の三つと違う意味で「白」が使われている熟語を一つ選んで記号で答えよ。

- ①潔白 ②白衣 ③告白 ④白眼

という問題とその解答と理由を作っている（正解③で、③のみ告げるという意味、他はしろい、清いなど）。実践終了後、ファイルした生徒全員分、百六十枚の「クラス漢和辞典」はコメント欄を付してクラスで回覧することにした。回覧後の生徒コメントからは、「白」に告げるという意味があるのを初めて知ったことや「優」に気づかずする、優柔の意味があるのに気づいた、「行」に店という意味があるが、銀行の行だといわれて納得したなどの声があった。身近な易しい漢字の字義を正確に意識することは、入試対策でもあるが、何より国語を尊重する態度につながるのではないだろうか。そのほか、漢和辞典を使う過程である生徒は「句形」が説明されている部分があるのに気づき、「漢和辞典があれば、句形集はいらんやん」という感想を述べていた。

近ごろ流行の電子辞書と違い、紙の辞書には著者の鎌田正先生ほか諸先生方のすばらしい「序」があり、漢和辞典が「書物」であることも実感できた。

この実践は一学期の期末考査後のわずかの時間を使っての実践だったのだが、夏休み期間中は、私が生徒達の手によって「編纂」された「クラス漢和辞典」に拙い「序」を寄せる期間ともなっている。



# 漢和辞典の活用法

あらふね たかし  
新船孝

東京都立豊島高等学校定時課程副校長

## 一 はじめに

現役の国文科の大学三年生に高校生の時、漢和辞典をどのように使ったのかを尋ねました。

まず、A君「漢文の授業で、わからない漢字・熟語があったときに使った。漢文に出てくる熟語は国語辞典などに載っていないことが多いので重宝した」。続いてBさん「部首や画数を調べたり、漢字の成り立ちなどを調べたりした」。この他にも、「書き順を調べた」「置き字にはどのような意味があるかを調べた」「漢字検定の勉強」などでした。

しかし、実は、一番多かったのが、「使った記憶がありません」という答えなのです。これには驚きました。

そこで、高校生に大切だ、必要だと考えた漢和辞典の活用法を紹介します。

## 二 四字熟語・故事成語からの漢文攻略

①知っている四字熟語や故事成語を挙げさせて、辞書を引かせる \*（ ）内は『新漢語林』からの抜粋。「臨機応変」（その場に臨み、情勢の変化に応じて適切な処置をとる）、「完璧」（物事に全く欠点のないこと）などは漢文に典拠があります。「馬耳東風」「一網打尽」「登竜門」「逆鱗に触れる」など、生徒が知っている四字熟語や故事成語をできるだけ多く挙げさせ、漢和辞典で引かせます。まずは、辞書を引くことに慣れることを目的とします。漢字の読みがわかっていない場合は「音訓索引」を使うと早く引けることを伝えましょう。

### ②訓読してリズムを身につける

「臨機応変」を漢文訓読では「機に臨み変に応ずる」、また「完璧」は「壁を完うす」と読みます。

## 三 漢和辞典の効能

・「わかった」という実感を多く持たせられる

新漢語林で「遠慮」を引くと「①遠い将来まで見通した深い考え。遠謀深慮。国②人に対して控えるにする。」とあります。この語釈を読めば、「遠慮」は日中同義異義語であることがわかります。また、「城」では用例として杜甫の「春望」の一部が現代語訳で示され、「城」を「長安の町」と訳しています。漢和辞典を引くだけではなく、読むことによって生徒は漢語の意味・場面・情景を「より理解できた」「わかった」などの実感を持つことができます。

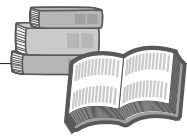
・「疑問」を「解決」できる

なぜ、「雪辱」に「雪」が、「横暴」に「横」が、「肉薄」に「薄」が、「報道」に「道」が使われているのか。「敗北」「指南」にはどうして方角があるのか。「国士無双」「太公望」「詩仙」「詩聖」は誰のことなのか。「麦秋」の季節はいつか。この他にも「抱負」の「負」の意味、「泰斗」「経済」は何の略、「遊説」の読み方などを調べさせます。疑問の解決が、現代生活にも応用できる漢語の知識や語彙を増やし、言語感覚も鋭くなることが期待できます。

漢和辞典には訓読文も掲載されているので、この読みを活用して「換骨奪胎」「傍若無人」「漱石枕流」「隔靴搔痒」「勤善懲惡」「汗牛充棟」「画龍点睛」などの短いフレーズを多く訓読させることによって、生徒は漢文特有の響きのよさを感じ、歯切れの良いリズムを身につけることができます。

③意味（構成）「転義」「たとえ」を確認し理解する  
「切磋（せつ）琢磨」の意味は「学問・道徳を励みみがくこと。また、友人同士が励まし合うこと」とあります。国語辞典ではここまでですが、漢和辞典では転じる前の「骨や角を刃物で切り、やすりで磋き、玉や石を槌で打ち、石で磨く」も載っています。「奇貨、居くべし」（よい機会に乗ずるたとえ）「鼎の軽重を問う」（他人の実力を疑い、軽視するたとえ）では語義の転化や、その語の成り立ちの説明があり、理解の助けになります。

④関連する人名・地名・出典名などを付録で確認し、発展学習とする  
「天下三分の計」は誰の策、出典は何、「鴻門の会」の場所はどこ、こんな時には付録の「中国学芸年表」「中国歴史地図」などが役立ちます。付録を有効に使い中国史へ興味を持たせましょう。



# （これ一冊で）古典と仲好くなれる辞書を 安藤千鶴子

『古語林』大修館全訳古語辞典 編者  
元都立小山台高等学校教諭

小・中学生が千年以上昔の『古事記』『万葉集』の歌を読んで「イイナア」と言うという。古語をつづり込んだ別れの歌を歌う卒業生が感動して泣いている。そういう国に生まれたことを幸せに思う。しかし千年……。ことばの意味・用法は刻々に変わる。たとえば『螢の光』の

①「互いに」、②は「一つのことばで」、③は「幸く〱おしあわせに」という意だが、多くの人がよく意味がわからずに歌っているようだ。また、有名な逢ひ見ての ちの心に 比ぶれば

昔はものを 思はざりけり （藤原敦忠『百人一首』）  
「一度見た、ただでこんなに深く思うなんて、この男はすごい純情なんだ」と純情な人は思うかもしれない。しかし本当は、美男の貴公子敦忠は初めて恋し

さきくとばかり 歌ふなり  
かたみに思ふ 千万の 心のはしを ひとことに

たとの深夜に及ぶ真剣な会議で、どんな古典を探るか、設問をどうしたらよさを引き出せるか、注をどうつけたらわかりやすくなるかについての一字一句の検討は、大学の授業とは異なる実践の場であった。

『大修館全訳古語辞典』は私どもが一九九七年に発行した『古語林』のエッセンスを包み込んだ小辞典である。『古語林』は、現代語・古語を通じてことばに限りない興味を持たれ、辞典に豊富な知識・識見を蓄えていらした故林巨樹先生を中心に、現場の経験豊かな五人の編集委員と、他の多くの協力者によって作成された。幸い好評を得たので、①もっとわかりやすく親切に、②もっと携帯しやすく安価に、を心がけて『大修館全訳古語辞典』は二〇〇一年に完成した。小辞典であっても大部分の古典はこれで十分読解できると信じている。

親本『古語林』のよさはいろいろあるけれども、大きな特徴の一つは文法のテキストを辞書の中に組みこんだことにあると思う。私は、古典の読解は、けつきよく「ことばの知識と、文章のはたらきの理解を念頭において、どんな古文を読む」ことだ、と思う。文章のはたらきは文法の教科書によらねばならないので、学習者は文法の教科書と辞書を併用

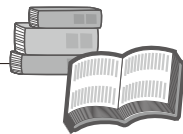
い女と共寝をしてすごした翌朝、「思った以上にすばらしいアナタ。これからのあなたへの思いは昔のもの思いとは段違い……」と言いつつたのだ。なぜか。この時代の「見る」は「男と女が関係を結ぶ」意だからである。現代語辞典にはないが、古語辞典ではむしろこの意味が中心だといっている。古語辞典をちよつと引けば、古語の、古歌の、本当の深い意味がわかる。正しい解釈のほうはずっとよい。

大学を卒業してすぐ新設の都立高校に勤めた私は、五年後歴史あるもと女子高へ、さらに二年後もと男子進学校に転じてさまざまな生きのよい生徒たちにくたえられた。その間角川書店の古典教科書の編集に約二十年参加させていただいた。さまざまな生徒への授業準備や、教科書編集の勉強が新米教師をゆっくりと育ててくれた。とくに後者は月数回、公務終了後、主幹の教授と、ベテランの先輩教師が

することになるのが古文の学習をイヤにさせる。『古語林』は、文法で最もネックになっている助動詞と助詞の、文法テキストにない要点までを、表にして辞書に組みこんでしまおうというかなり乱暴なことを考えた。加えて、古文で最も苦勞する二重・三重の敬語を、できる限り詳細に解説した。学習者は古語の品詞分類や活用のかたなど、ごく基本のことを学んだのちは、『古語林』『大修館全訳古語辞典』で文法の知識を引けばよいことになる。辞典だけを傍らにおいて、どんどん読んでいってほしい。

このほか『大修館全訳古語辞典』はいわゆる「看板」（重要古語の文例を、最も有名な文章と平易な口語訳で囲みにする）、すべての文例にいていねいな現代語訳（逐語訳）をつける、名歌・名句解説、古語ウォッチング（古典に親しむための軽妙な読みものコラム。好評）、人物・事項に関する簡明な事典など、古典学習の助けになる多くの工夫を加えた。私は林先生の御指導に従って、全編に目を通した。

この小辞典一冊を傍らにおいて、古文に親しみ、古典をどんどん読んでほしい。『万葉集』も、『源氏物語』、『平家物語』も、芭蕉も、日本の古典は本当にすばらしい。



# 紙の辞書はビジュアル

ながたさとみ  
永田 里美

大阪府立西寝屋川高等学校教諭

高校生となり本格的に古典を学び始める生徒にとって、辞書は必要不可欠なものとなる。それは、原文を自力で訳すための道具であるだけでなく、歴史的な推移の上になりたつ言葉というものを学ぶ恰好の場を与えてくれるものでもある。

生徒には予習段階でももちろんのこと、授業においても机に辞書を用意しておくよう指導する。授業で生徒が語義を取り間違えていると判明した場合は、全員に辞書を再度引かせて、選択した語義が語彙項目の何番目に位置するのか、挙がっている用例はどの時代のものなのか、などを確認させる。そうすることで、生徒はその語のもつ意味の広さや重要性、歴史的な変化を意識するようになる。

教室で机上の辞書を見渡すと、今や生徒の殆どが電子辞書を使っていることがわかる。しかし授業者としては、古典の基礎を培う間は紙の辞書をすすめている。紙の辞書の方がビジュアル

上、印象に残りやすいと思うからである。とりわけ重要単語は一目で把握しやすい仕組みになっている。字体の大きさや色付けは言うまでもなく、重要単語ほど語義が広く紙幅も割かれるので、ページを開けた瞬間に、その語がもつ「力」を意識することになる。画面をスクロールする電子辞書と違い（一目で分かる）ということに紙辞書の魅力があると考ええる。そのなかでも、個人的に気に入っているのは『大修館 全訳古語辞典』である。最重要項目の冒頭に掲げられた典型的用例の囲みが、看板として目に飛び込んできやすい点や、図式化された助詞・助動詞の基本文型が、煩瑣に見えがちな意味用法を構文的にすっきりと説明してくれる点もよく、授業で引用することが多い。

このように紙の辞書はビジュアル要素に優れており、また使い方次第で授業にもっと活用できるのではないかと思う。例えばスクリーン画面に映し出して、紙辞書のビジュアル情報を共有してゆくのも一案である。情報科と提携するなどして効率の良い方法を考案していくとよいと思われる。

電子辞書は目当での単語を即時に引くことができるという利点はあるが、一方で生徒からは「すぐに単語が引けるぶん、すぐに忘れやすい」「印象が薄い」という声を聞く。古典の基礎基盤を形成する時期にはじっくりと対話をするように辞書をひいてほしい。言葉の中核となる意味とその広がり様を目で体で感じ取ることで、古語が生きた姿として身に付くことになると思う。（上記の授業内容は昨年度まで赴任していた大阪府立大手前高等学校での実践に基づくものです。）

# 辞書は古典への入口

まるかわ のぶこ  
丸川 信子

広島県立海田高等学校教諭

「辞書を使おう」と考えるなら、新入生に紙の辞書（推薦辞書）を購入してもらうのが基本。本校では英語科でも全員に同じ紙の辞書を買わせている。電子辞書は二年以降に使用可。（これで不公平にならない。）次に、毎時間必ず辞書を机に出しておくことを徹底する。中学校では古語辞典を使ったことがないわけだから、辞書の引き方・読み方に慣れることを念頭に置く。しかし、ここで①のような物理的な問題と②③の問題が発生。

①全員が同じ辞書を持っていない（推薦辞書を買っていない）ので、同じ指示が出せない。②単語の意味のどこを写すか、あまりに多くの意味が羅列してあって迷う。③単語の下に、「他サ四」「自ラ下二」などの「形動ナリ」などの暗号が並んでいる。

そこで、①については、推薦辞書を使っている生徒が多数なので、最初に引けた子に、ページ数を言わせる。（これはポイント制）意味を確認したら、違う辞書を使っている生徒に、その

意味があるか確認する。辞書によって少し意味が違ったりするのも確認できる。②多義語については、番号で見出しになっている意味の中から一番先頭の意味をつだけ、並列させて抜き書きするように決めておく。③は、品詞を覚えて、用言の活用を教える時に説明するから、気にしなくてよいと伝える。最初に時間はかかっても、「一緒に引き、一緒に読む」を原則にすることが辞書への抵抗をなくすことにつながる。

そして最も大切なことは、辞書を引くことで、古文への興味関心が喚起されること。入門として「竹取物語」を読むとき、「うつくし」「けうらなり」という語が、どんな様子なのか、まづ文脈から想像させてから引く。ここで、『全訳古語辞典』ならば、付録に「現代語で引く古語類義語集」で「かわいい」と「美しい」にあたる古語を見ておく。そこに「匂ふ」があるので、これも覚えておいてもらう。また、「得てしがな、見てしがな」の「見る」の意味が、「得」と並列してあることから、「結婚する」という意味であることに気付かせる。「見る」は「古語ウォッチング」で「見る」と「見ゆ」の違いを読むと、結婚の意味がよくわかる。

かぐや姫は「女の一生」の物語でもあるので、辞書から古典常識も学べる。「髪上げ」「裳着」、さらに「女房装束」（着付けの順で裳は盛装の最後の仕上げとわかる）を引く。結婚は文化だから、親の世代の結婚（「お見合い」で結婚した親が激減！）や現代の若者の結婚観などを話題にする。このように辞書を読んだ、生徒たちに古文の世界への扉を開いて欲しいものだ。

# もう送り仮名に迷わない！

塚田 勝郎  
 筑波大学附属高等学校教諭

はじめに

本講座も第四回を迎えました。今回は、漢文訓読の重要なツールである送り仮名に取り組むことにしましょう。

実は、教科書出版社に寄せられる漢文関係の質問で、最も多いのが送り仮名についてのものだそうです。また、現場の教師の多くが漢文教材の改善点として挙げるのが、教科書間の送り仮名の相違であるとも聞きます。

送り仮名の基準は古くは「句読・返点・添仮名・読方法」(漢文三関スル文部省調査報告、明治四五年)に遡ります。戦後は現代文の送り仮名の基準を示した「送り仮名の付け方」(昭和四八年、内閣告示)も取り入れながら、現在の送り仮名のルールができあがったと言ってよいでしょう。しかし、最終的には教科書出版社が独自に基準を持ち、教科書を編集しています。その結果、送り仮名の「ゆれ」を招いてい

るのが実情です。なお、「(訓読の)ゆれ」とは、解釈の相違には至らない訓読のちがいや、表記のばらつき、不統一などの総称であることをお断りしておきます。今回は、教科書に見られる送り仮名の原則と現実を探ってゆくことにします。

## 送り仮名とは

そもそも、送り仮名の必要性はどこにあるのでしょうか。当然のことですが、中国語と日本語は別の言語です。両者の間には様々なちがいがあり、その一つが語の並び方です。○中国語 一字一音節で、活用や語形変化をほとんど持たない。意味は語順で決まる。○孤立語

○日本語 実質の意味を持たない語によって、実質の意味を持つ語と語を膠のようにつなげてゆく。○膠着語  
日暮道遠。

## 大器晩成。

右の例文は、もともととは中国語で「日暮道遠」「大器晩成」と書かれたのですが、これを日本語に翻訳して読む時に、助詞(ここでは「テ」「ハ」)や用言の活用語尾(ここでは「レ」「シ」「ス」)を補う必要があります。これが送り仮名です。送り仮名は句読点・返り点と並んで、中国語を日本語に変換するためのツールの一つです。

## 送り仮名のルール

送り仮名に関するルールは、現在では次のような形で定着しています。

- 1 送り仮名は、漢字の右下にカタカナで、文語文法に従い、歴史的仮名遣いを用いて付ける。ただし、再読文字の再読された部分は、漢字の左下に付ける。
- 2 用言(動詞、形容詞、形容動詞)は、原則として活用語尾を送り仮名として付ける。

1については例を示すまでもありませんが、最近の大学入試の問題文に次のような再読文字の送り仮名が見られました。

且ニ未ダこれでは慌サレて者の生徒は、「ニとせず」セ「ニせざる

に」と誤読しかねません。この送り仮名の付け方は間違いないとは言えませんが、現在の教科書の方式には合致していません。

2の例をあげましょう。

- A 是亦走也。(孟子、梁惠王上)  
 B 是亦走也。(同)

「走」の読みは、Aの「はしる」でも、Bの「にぐ」でも、「逃げる」という意味にちがいはありません。この例では、活用語尾の「ル」「グル」が、読みを導くヒントにもなっていることがわかります。

「曰はく」は、以前は「曰」と「曰」の二種類の表記がありましたが、現在の高等学校用教科書では「曰」に統一されています。「曰」でも「いはく」と読むのは明らかですが、「曰」の方が原則に適っています。

以上の二項目は、高等学校の教科書を見る限りでは漏れなく踏襲されています。これに対して、完全に市民権を得ているとは言い難いのが、次の三項目です。

- 3 助詞は、原則として送り仮名として処理する。
- 4 誤読のおそれがある場合は、「二字多く送る」。
- 5 読みにくい漢字は、一字送ってヒントとする。

3は少々わかりにくいかもしれませんが、次の「於」と「自」の例で確認できます。

C 千里之行、始<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>足下<sup>一</sup>。(老子、第六章)

D 有<sup>リ</sup>朋<sup>ノ</sup>自<sup>リ</sup>遠方<sup>ノ</sup>来<sup>ル</sup>……。(論語、学而)

Cでは「於」を直接訓読せずに「足下」に「ヨリ」を送り、Dでは「自」を直接訓読しています。この例では「於」の処理が原則どおりで、「自」の処理は例外といえるでしょう。4の例としては、「故に」と「故らに」、「自ら」と「自づから」があります。そこには、送り仮名に差違をつけることで読みを区別しようとする意図がありますが、「故に」と「故に」のように、読みが異なっても送り仮名を区別しない教科書もあり、この項が徹底されているとはいえない状況です。

5については、「又」「亦た」「復た」の例があがるでしょう。常用漢字である「又」に対して、なじみの薄い「亦」と「復」は「た」を送ることによって読みが導かれるのです。しかし、この項も教科書によって扱いが異なり、「亦た」を「亦」と表記するものも相当数あります。

### 送り仮名の実例

では、詳しく実例を見ましょう。

- ① 死馬<sup>スラツ</sup>且<sup>ツ</sup>買<sup>フ</sup>之<sup>レ</sup>。(十八史略、春秋戦国・燕)
- ② 此<sup>コレ</sup>之<sup>ノ</sup>謂<sup>フ</sup>物化<sup>ト</sup>。(莊子、齊物論)
- ③ 此<sup>コレ</sup>惟<sup>タ</sup>救<sup>ヒテ</sup>死<sup>ヲ</sup>……。 (孟子、梁惠王上)

以上のことから、漢文の送り仮名はけっして無原則に付けられているわけではないことがわかります。

余談になりますが、生徒が書き下し文を作成するときに最も悩むのが「之」のような多義語の書き分けのようです。生徒の多くは、「この漢字はいつも漢字で（ひらがなで）記す」と思い込んでいて、漢字の意味や働きによって書き下し文の表記が異なってくるのがなかなか飲み込めないのです。そこで、折にふれて次のように黒板に整理することもある有益ではないでしょうか。

### 【板書例】

之<sup>これ</sup>、之<sup>こ</sup>、之<sup>こ</sup>、之<sup>こ</sup> ↑漢字で書く  
の<sup>の</sup>（格助詞）↑ひらがなで書く  
為<sup>な</sup>す、為<sup>な</sup>る、為<sup>な</sup>る、為<sup>な</sup>に ↑漢字で書く  
たり<sup>たり</sup>（断定の助動詞）↑ひらがなで書く  
る・らる<sup>る</sup>（受身の助動詞）↑ひらがなで書く  
若<sup>し</sup>く、若<sup>し</sup>く、若<sup>し</sup>くは、若<sup>し</sup> ↑漢字で書く  
ごとし<sup>ごとし</sup>（比況の助動詞）↑ひらがなで書く  
如<sup>し</sup>く、如<sup>し</sup>く、如<sup>し</sup>くは、如<sup>く</sup> ↑漢字で書く  
ごとし<sup>ごとし</sup>（比況の助動詞）↑ひらがなで書く

例文①・②では、「之」に「これ」という共通の訓が与えられています。②では「れ」が送り仮名として扱われています。また、例文②・③の「此」を見ると、③では「れ」が送り仮名とされています。

例文①では「之」に「ヲ」が送られていますから、「これ」と読むことに紛れはありません。一方②では、「レ」を送らないと「此をの物化と謂ふ。」という珍妙な訓読が生まれるおそれがあります。ルールの4「誤読のおそれがある場合は、一・二字多く送る。」の条項を適用したことになります。②・③の「此」も、誤読のおそれはないものの、同訓の「之」の送り仮名ルールを準用しているのです。

さらに「是」の例を見ましょう。

- ④ 吾<sup>ガ</sup>党<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>直<sup>キ</sup>者<sup>ハ</sup>異<sup>ナリ</sup>於<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>。(論語、子路)
  - ⑤ 是<sup>コレ</sup>罔<sup>ス</sup>民<sup>ヲ</sup>也。(孟子、梁惠王上)
  - ⑥ 於<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>士<sup>ノ</sup>争<sup>ヒテ</sup>趨<sup>ク</sup>燕<sup>ニ</sup>。(十八史略、春秋戦国・燕)
  - ⑦ 是<sup>コレ</sup>故<sup>ニ</sup>明<sup>ニ</sup>君<sup>ヲ</sup>制<sup>シテ</sup>民<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>産<sup>ヲ</sup>……。 (孟子、梁惠王上)
- 読み方は、④「これ」、⑤「これ」、⑥「ここ」、⑦「ここ」です。④・⑤では前の「之」「此」の例と同じように「れ」を送り仮名とするか否かというちがいが見つかります。先に確認したルールが当てはまり、⑤は「ここ」や音の「ぜ」と誤読されないように「れ」を送っていることが確認できます。

### 送り仮名の「ゆれ」への対処法

送り仮名の「ゆれ」の根本的な解決法は、関係者が話し合って送り仮名を統一することです。過去には大学漢文教育研究会が「送り仮名法私案」を発表し、送り仮名の統一を提案しました。近いところでは、全国漢文教育学会が「訓読のゆれ」の事例を広く収集し、教科書出版社も巻き込んだ形で「ゆれ」の解消を目指しましたが、抜本的な解決には至っていません。送り仮名の「ゆれ」の解消には、まだまだ時間がかかりそうです。

では、現実的には送り仮名の「ゆれ」にどのように対処すればよいのでしょうか。それは、細かな送り仮名のちがいを気にしないことです。乱暴に聞こえるでしょうが、原則を知った上で、教科書によって送り仮名がちがつて当然と考えていれば、右往左往することはありません。生徒にも送り仮名の原則と現実を、機会あるごとに伝えてゆきたいものです。

送り仮名について正確な知識を持ち、賢く送り仮名と付き合おう——これが今回の結論です。

次回は、返り点、カギ括弧、合符、繰り返し符号など、記号類を一括して取り扱います。

※この連載の第2・第3回は大修館HP内「WEB国語教室」に掲載されています。第5回は11月頃、「WEB国語教室」に掲載する予定です。

## 1 イギリスの「高等学校」

イギリスは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北部アイルランドの四地域からなる連合王国である。教育制度は四つの地域ごとに異なるが、ここではイングランドに限定して話を進める。

イングランドでは、初等学校で六年間(五〜十一歳)、中等学校で七年間(十一〜十八歳)の就学を基本とする。このうち、公立・公営中等学校の大半は総合制中等学校(コンプリヘンシブスクール)と呼ばれる学校で、日本の公立中学のように生徒の能力が混在している。能力差に応じたグラマースクール(選抜制)とモダンスクール(非選抜制)は、一部の地域に限定される。中等学校は五年間の前期課程(義務教育)と二年間の後期課程に分かれている。後期の二年間はシックスフォーム(sixth form)と呼ばれ、大学などの高等教育期間に進学するための教育課程が用意されている。シックスフォームに進学するためには、十六歳の時に学校外の試験団体による「中等教育修了一般資格(GCSE)試験」で所定の成績を獲得することが求められる。大学進学のためには、シックスフォームの在学中に「一般教育資格上級レベル

「国語」に相当する中等学校の科目は「英語(English)」で、日本と同様に「話すこと・聞くこと」「読むこと」「書くこと」の三領域からなる。GCSE試験では、これらの領域を総合的に取り上げた「英語」に加えてEnglish languageやEnglish literatureの試験科目がある。前者は実用的な英語の知識・技能やノンフィクションの理解と作成を取り立てており、後者は文学の知識・教養とフィクションの理解と創造を扱っている。これに応じて、多くの中等学校では「英語」のほかに「文学」が選択科目として設置されている。

シックスフォームの授業は大学の授業に近い内容で展開しており、A-Level試験に対応すべく、「英語」や「文学」のほかに「創作(Creative writing)」「メディア制作」「ドラマ」などの授業がある。これらは基本的に選択科目として開設されている。生徒は、自分の希望する大学が入学要件として求める科目と成績に合わせて、授業科目を選ぶことになっている。その点は日本の予備校に似ている。

## 3 授業の展開例——前期課程の授業

ここから、筆者が実際に参観した中等学校の授業例を紹介する。「英語」では、GCSE試験の「英



第十学年の授業風景

「WEB国語教室」運動



## 世界の「国語」教育事情 第3回 イギリス ふじもり 藤森 裕治 信州大学

ロンドンオリンピックが記憶に新しいイギリス。日本のような一発勝負の受験とは異なる「GCSE試験」「A-Level試験」といった試験制度のもと、表現活動を重視した「国語」教育が行われています。

ル(GCE A-Level)試験」を受けて所定の成績を収めることが条件となっている。日本のような一発勝負の大学受験制度はない。なお、後期課程に位置する教育機関としては、シックスフォームの他に、職業教育を提供する継続教育カレッジ、シックスフォームと職業教育を合わせた高等専門学校、成人教育学校などがある。

## 2 教材の選ばれ方

イングランドに教科書検定制度はなく、教科書はすべて学校独自の裁量で選択される。しかし、大半の中等学校はGCSE試験やA-Level試験で良好な成績を収めるため、これらに準拠したカリキュラムと教材を準備している。生徒の成績は、そのまま学校評価に反映されるからである。中等教育以降の試験団体として国から認可された組織のうち、代表的なものはOCR, Edexcel, AQAの三団体で、いずれも試験に準拠した教科書や教材を販売している。そのため、どの試験団体を選ぶかは学校の裁量によるが、教科書や教材は選んだ試験団体で制作したものが用いられることになる。日本で言えば、大修館書店が大学入試を請け負い、その問題を取り上げた教科書や教材を高校向けに販売しているということである。

語」で取り上げられる作品と同じものが授業でも扱われる。その一つに、スタインベックの『二十日鼠と人間』がある。参観した学年は第十一年(十六歳)で、三〇名ほどのクラスだった。授業は五〇分間で、『二十日鼠と人間』に登場する人物と場面を選び、そのキャラクターを読み取って演じてみるというものである。始めに教師から本時のねらいと活動要領が示され、前の時間にどこまで進めていたのか把握するように促される。黒板はなく、プロジェクトとホワイトボードを用いての授業である。生徒たちはペアを組み、主人公の農夫や農場主のおかみさんなどになりきり、どんな特徴をもった人物かを話し合いながらワークシートにまとめていく。授業の後半では二組の生徒が選ばれ、教壇で読み取った人物像を「演技」という方法で発表する。フロアの生徒はそれについてコメントする。

## 4 授業の展開例——後期課程の授業

シックスフォームの授業は十名〜十五名程度で行われる。A-Level試験の文学では、イギリスの現代詩が取り上げられる。参観した授業ではCarol Ann Duffyの詩が扱われていた。授業時間はやはり五〇分間である。前半は二人一組になっ

た学生のペアが課題について調べた内容をパワーポイントにまとめて発表し、後半では教師がDuffyの詩からいくつかを選んで、そこにみられる技法について講義をするというパターンで進められていた。その日の授業で教師が取り上げた技法は「不均衡」である。例えば「裸の女」と「町を歩く」が繋がると、読者に違和感を与える。読者はこの違和感を理解するために、二つの表現が結びつく意味を想像し、そこに詩的表現の味わいを感じ取る。この効果をねらいとした表現技法が「不均衡」であることが説明された。

## 5 表現力を育てる

イングランドの「国語」では表現活動が重視されている。人前で演じたり発表したり、絵や本にしたりする活動が日常的に行われている。話すこと・聞くことや書くことを主眼とする授業のみならず、文学の読みの学習においてもそれは同様である。この背景には、GCSE試験やA-Level試験の中身がかかわっている。例えば先述した『二十日鼠と人間』を素材としたAQAの試験問題は、次のようなものである。



シックスフォームの授業風景



■この小説でCheyの妻が持っている重要な役割は何でしょうか？ 彼女の言葉、出来事、行動、他の登場人物の意見などに詳しく触れながら解答しなさい。

■この小説で演じられた役割のうち、孤独であることによるものを調べなさい。言葉、出来事、登場人物について詳しく触れながら解答しなさい。

先述した「小説の登場人物を演じる」という活動は、このような問題に対応するための現実的な方略なのである。

※この文章は次の報告書を踏まえている。

新井浅浩・藤森裕治「イギリスの初等中等教育に関する調査研究報告書」財団法人教科書研究センター（平成十三年三月）

このリレー連載の第2回「フランス」（京免徹雄）は、大修館HP内「WEB国語教室」に掲載されています。この第3回も「WEB国語教室」に10月末にアップする予定です。

# 読んできた本、 読んでほしい本 ②

しもにし  
みほ  
下西 美穂

東京都立南葛飾高等学校



本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介します。

## ■教師であることの幸せを教えてくださいる本

「教師っていったい何?」。日々様々な課題に直面する中で、時には不安や憤りを感じることがある。何かを見失いそうな時、私が頼りにしているのが、ミッチ・アルボム著『普及版』モリー先生との火曜日(別宮貞徳訳、日本放送出版協会、二〇〇四)だ。読むたび、成長過程の生徒たちと向き合えることのありがたさを感じ、教師であることがいかに幸せなことか改めて気づかされる。「人生に意味を与える道は、人を愛すること、自分の周囲の社会のために尽くすこと、自分に目的と意味を与えてくれるものを創りだすこと」、「ほんとうに満足を与えてくれるものは(中略)自分が人にあげられるものを提供すること」、これらの言葉は

私にいつも自信と力を与えてくれる。

この本は、ある実在の老教授の言葉や生き方を記したものである。大学教授「モリー先生」はALS(進行性筋萎縮症)を患い、確実に迫ってくる死を感じながら最後の日々を暮らしている。死の間際にありながら、彼は人生において大事なものの、家族、友人、自然、音楽などを心から愛しながら幸せに過ごす。そして「人間らしく生きる」ことをテーマに、かつての教え子ミッチと週一度火曜日、「講義」と称して対話を重ねるのである。読むと私は、国語教師である前に、教師として人間として大事なものは何なのか、じっくり考えることができる。そして、人の成長に携わり、「人間らしく生きる」ことを目指せる仕事に感謝せずにはいられなくなる。

ヴィクトール・E・フランクル著『夜と霧「新版」』(池田香代子訳、みすず書房、二〇〇)、ランディ・パウシュ/ジェフリー・ザスロー著『最後の授業』(矢野薫訳、武田ランダムハウスジャパン、二〇〇)の中にも教訓は多い。『夜と霧』は、ドイツの強制収容所に収容された心理学者の手記である。「人間はひとりひとり、(中略)自分がどのような精神的存在になるかについて、なんらかの決断を下せるのだ」という言葉は、私を戒める警句である。『最後の授業』は、癌に冒された大学教授ランディの最後の講義とそこにある思いを記したものである。生徒たちに伝えるべきことは何なのか、それを私は伝えられているのかを考えるきっかけとなる。そしてまた、自分自身が勇気や行動力を得られる一冊である。

# これからの「書くこと」の指導

しまだ やすゆき  
島田 康行

筑波大学人文社会系教授

## ◆これまでの「書くこと」

最近の高校「国語」における「書くこと」の指導にはどのような問題があるのだろうか。筆者は、その最大の問題を「なされていない」ことだと考えている。急いで付け加えるならば、もちろん多くの教室で工夫の凝らされた実践がなされ、目覚ましい成果を上げていることを無視するわけではない。すでに「書くこと」の指導には分厚い蓄積があり、日々新しい知見が加えられてもいることも重々承知している。

あえて問うのは、そのような取り組みがなされているのは全教室の何割においてか、ということである。

限られた時間数の中で、なされるべき指導の内容はあまりに多い。旧来の学習指導要領における「国語総合」には、「書くこと」を主とする指導には三〇単位時間程度を配当するもの」と規定されているが、とてもそれだけの時間を割くことはできない、という教員の声もしばしば耳にするところである。

## ◆社会で求められる「書くこと」の力

どのように生きていくのであれ、文章を書く力が必要ないとは誰しも思うまい。高校を卒業していく生徒たちには、今、どのような「書くこと」の力が求められている

のか。

たとえば、現代の社会において、多様な価値観をもつ人々と関わりながら、自立して生きていくためには、物事を相手に分かりやすく説明したり、筋道を立てて考え、考えた内容を説得力のある文章にまとめたリすることの重要性は大きい。大学で学ぶにせよ、職に就いて働くにせよ、その重要性に変わりはない。

新しい学習指導要領における「国語総合」の「書くこと」の指導事項を確認してみれば、「相手や目的に応じて文章の形態や文体、語句などを工夫して書く」、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の

考えを文章にまとめる」、「対象を的確に説明したり描写したりする」といった項目が並んでいる。まさに、これからの社会で求められる「書くこと」の力の育成が目指されているわけである。配当時間はさらに増え、「三〇〜四〇単位時間を配当するもの」とされている。

平成二四年度全国学力・学習状況調査「国語」においても、伝える相手を意識させる問題が目立った。先ごろ公表された結果の分析では、いずれも正答率は低調で、誰に何を伝えるべきなのか十分に意識されていない回答も多く見られたようである。

相手と目的を意識した伝達の力は、小・中学校から高校までの指導を通して養われる必要があるということになる。

## ◆変わりゆく入試「小論文」

高校「国語」で「書くこと」のトレーニングを十分に積まないまま大学に進学する学生が少なくない一方で、入試「小論文」対策としての模試や個人指導は盛んに行われている。

筆者の定義では、「小論文」とは、選抜などを目的として、一定の条件を与え、「課して」書かせる意見文である（「課して」というところに本質がある）。

筋道を立てて考え、考えた内容を説得力のある文章にまとめる練習として、「小論文」の学習には一定の効果もある。

しかし、入試「小論文」はあくまでも選抜のツールである。これを課すことに大学が意義を認めるのは、それがツールとして高い性能を発揮する場合に限られる。この二〇余年で急速に広まった「小論文」であるが、それは優秀な学生を選抜するために有効なツールであったのだろうか、今なおその有効性は維持されているのだろうか。

近年、入試「小論文」が、意見を述べさせる問題のウエイトを下げ、要約させる問題に力点を移しつつあるのは、多くの大学が「小論文」のツールとしての性能に限界を感じ始めているからではないか（拙著『書ける』大学生に育てる」参照）。

入試「小論文」が、意見を述べさせることをやめたとき（それはもはや「小論文」

ではないかもしれないが）、「書くこと」の指導が果たすべき役割は否応なく大きくなるだろう。その時「書くこと」の指導は、高校生の論理的思考・表現力をどのように育てることができるだろうか。

## ◆これからの「書くこと」

先述のように、現代の社会において自立して生きていくために、わかりやすく説明したり、筋道を立てて考え、考えた内容を説得力のある意見として文章にまとめたリする能力は重要である。そのような文章は相手と目的に応じてさまざまな形式を取る。ある時には施設の利用案内として、ある時には学術論文として、またある時には依頼の手紙として、新しいサービスの企画書として、誰しもの生活に密着して現れる。

「書くこと」の指導は、そのことを学習者に明確に意識させた上でなされなければならないだろう。高校生にとっては、目の前の問題として入試「小論文」があるにせよ、その学習はより普遍的な目的のためになされるべきである。

## 宮沢賢治は高校の教材に向いているか

つかやひろかず  
塚谷裕一東京大学大学院理学系研究科  
教授。専門は植物学。著書に  
『植物のこころ』（岩波新書）、  
『カラー版 ドリアン—果物の  
王』（中公カラー新書）など。

こういう事例を想定してみる。いま、ある小説の中で日本の夏の場面が登場し、そこに蟬の声が云々という記述があったとしよう。そしてこの小説を、北ヨーロッパの地域の高校生が、授業で読むことになったとする。当然、翻訳である。北ヨーロッパには蟬がまったくいない。したがってここで想定している授業でも、蟬というものについて、昆虫の一種で、羽で飛び、木の幹にとまって大きな声で鳴く、等々と説明するとしよう。しかしその説明を手がかりに読む北ヨーロッパの高校生の理解は、日本の高校生たちがその原文を読んだときの理解にどれだけ近づけるだろうか？ 蟬のあの声は、単にある一種の昆虫が出す音などではない。それを現場で体験したものにとっては、それと切

っても切り離せない蒸し暑さあるいは熱気、照り返すような日差し、したたる汗といったものすべてと一体になったものだ。もちろん北ヨーロッパの高校にも昆虫マニアの学生はいらるだろうし、旅行で日本の夏を体験したことのある学生もいるかもしれない。彼らにとっては日本の学生と同程度の理解も可能だろうが、そうでない学生にはとうてい無理だろう。高校の教育の現場で目指すところが、学生間のある同一レベルの理解達成だとすれば、この場面を教材にすること自体が不適切だと考えられる。

以上のような考えを前提に、編集部からのテーマとして与えられた宮沢賢治を検討してみよう。高校で宮沢賢治というのは易しすぎはしないかとも思うが、それは文章その

て、一つの場面を見よう。母子の熊の会話を主人公が陰から聞く場面である。

時期は「ある年の春早く」。「驚いたことは母親とやっと一歳になるかならないような子熊と二匹、ちょうど人が額に手を当てて遠くを眺めるといったふうに、淡い六日の月光の中を、向こうの谷を上げしげ見つめているのに会った」。この二匹の熊は、「谷のこっち側だけ白くなっている」のは何なのかを議論しているところである。「どうしても雪だよ」と言う子熊に対し、母熊は「あざみの芽を見に昨日あすこを通ったばかり」だと否定する。しばらくして母熊はこう言う。

「おかあさまはわかったよ、あれねえ、ひきぎくらの花。」  
「なあんだ、ひきぎくらの花だい。僕知ってるよ。」  
「いいえ、おまえ、まだ見たことありません。」  
「知ってるよ、僕この前取ってきたもの。」  
「いいえ、あれひきぎくらではありません、おまえ、取ってきたのきささげの花でしょう。」

「そうだろうか。」子熊はとぼけたように答えた。

最後の「とぼけたように」が効いた、とても良い場面だが、ここには多数の問題が含まれている。まず簡単などころから行こう。この子熊、「やっと」一歳になるかならない」とある。まだ雪が残っているのかもしれないというほどの

ものの平易さについてのみ言えることだ。上述のように考えてみると、むしろ逆といえる。

まず宮沢賢治は花巻を主な活動の舞台にした教師だった。しかも博物学や農学の興味でいっぱい的人物だった。それだけにその作品は、東北の森を舞台とすることが多く、その上、作品に登場する動植物やその行動の背景には、博物学的あるいは農学的知識がたつぷりと詰まっている。だからこそ自然好きな読者・生徒には大いにアピールするものとなっているが、逆に教科書で取り上げるとなると、そこが問題となる。なぜならそうした博物学的な知識背景は、義務教育においてほとんど扱われておらず、その内容は万人向けとは言いがたい点を多く持つからだ。

たとえば『よだかの星』という作品。これはヨダカという鳥を予め知っているかどうかで、大きく読みが変わるだろう。「よだか」という名前から、あの口の大きな、夜行性の、変わった姿の鳥を即座に思い起こす読者は、この作品が描く疎外感にすぐ入っていくことができるだろうが、この作品に付せられた注記で初めてヨダカなるものを知った読者は、そうはいかない。逆にその名を鳥の一種として暗記するだけだ。

現行の教科書で多く取り上げられている『なめとこ山の熊』も、そうした意味で、大変に難しい作品だ。一例とし

早春にまだ一歳にならないということは、この子熊が生まれたのは前の冬のさなかということになる。しかし熊は冬、穴ぐらで冬眠するはずだ。これはどうしてか。

こは熊の習性そのものを反映した表現なのだ。この熊は、物語の舞台が岩手県だからツキノワグマである。ツキノワグマは冬眠中に巣穴で出産する習性がある。だからこそ、この子熊の齢は「やっと一歳になるかならない」のであり、またそれゆえにこそ、この雪解け後の風景は、この子熊にとって物心ついて初めて見る景色なのだ。こは、知識背景を持たない学生が重要なポイントを読み取れないまま素通りしてしまわないよう、是非注をつけるべきだろう。こういうところが賢治の作品には大変多い。

ただし今のような箇所は、注をつければ理解度がある程度そろえることが可能だ。問題は、そうは簡単にいかないところも、多数見られることである。会話の中に出てくる花の名前、「ひきざくら」と「きささげ」を見てみよう。まず「ひきざくら」。これについては、コブシのこと、と注を付す例が多い。なるほど、地方名のひきざくらは知らないがコブシなら知っていると、という生徒にとっては、これは大変に役に立つ注だ。地方名でもとこの木を知っていた学生との差がこれによって埋まり、その瞬間、青い空と雪解け直後の山を背景に白くそびえ立つコブシの満

い。しかしキササゲの花は地味なアイボリー色であり、しかも大きな緑の葉を一面に茂らせた真夏時に、その葉の中に埋もれるように咲く。色彩的にも季節的にも、とうてい、雪と見まがう余地はない。母熊が言下に「違う」と言うのも宜なるかなだが、それにしても、この「きささげ」は、本当に標準和名で言うところのキササゲなのか。

ざっと調べたが、「ひきざくら」と違って、「きささげ」には地方名として別種をさす可能性がほとんどないようだ。あるいは近縁種のハナキササゲかアメリカキササゲだったのかもしれない、という仮説もないわけではない。だがいづれにせよその花は、どうしてもその大きな葉の緑と一体として目に入る。残雪に見えるというのにはあまりに無理がある。

また上記の通り、キササゲもハナキササゲも外来種で、公園や寺社境内などには植えられることがあるが、熊たちが住まう山奥には生えていない。集落の近くに野生化することもあるが、生まれたばかりの当年の子熊を、母熊が里に行かせたりするだろうか。

またこれが本当にキササゲだとすれば、子熊が「この前取ってきた」のは、生まれて半年後の、前年の夏だ。その場合、秋、冬と半年も経ってしまったそんなにも以前のことを、「この前」と言うだろうか。一つの案としては、子

開の姿が思い浮かぶだろう。だが植物の名前に明るくない読者にとってはどうか。「ひきざくら」が「コブシ」になっても、理解の度合いは全く変わらないだろう。夏の蟬を体験したことのない学生が、文字知識として蟬の説明を受けたときと同じことが起きるだけのことである。コブシを見知っている生徒が脳裏に浮かべる光景、そのひんやりとした、しかし明るい空気の雰囲気は、決して伝わらない。覚えなくてはならないやっかいな単語が増えてしまっただけのことだ。

次の「きささげ」はどうか。これを文字通りキササゲ、ノウゼンカズラ科の木の一つ、とする注が一般的だが、これはさらに問題が大きい。第一に、キササゲはとても地味な木なので、植物好きあるいは園芸家の間でもそれほど知名度の高い種ではない。まして、植物に強い関心のない読者にとっては、上記のひきざくらの例と同じで、注があっても理解の度合いは本質的に変わらない。

第二にもっと重要な点として、これをキササゲとする注には、実物のキササゲをよく知っている読者をも混乱させる弊害がある。なぜなら、キササゲの花はコブシと似ても似つかないからだ。コブシは早春、葉を開く前に、純白の花を枝一面につけるため、遠目にも白い塊となって見える。時期といい見た目といい、残雪と見間違えても不思議はな

熊が秋以降は冬眠していたため、時間の感覚が曖昧になったというこじつけも可能だ。だが、素直に納得できる説明とは言いがたい。

上記のキササゲを巡る季節の問題は意外にも、私の調べた限りでは、わずかに三浦ら（二〇〇三年）において指摘・議論されているのみだ。しかし植物に詳しい読者なら、これまで誰もが本作品を読むたびに「？」とってきたはずである。かように問題を多く含んだこのキササゲに、「ノウゼンカズラ科の落葉樹。高さ五から十二メートルになる。葉は対生」などという注をつけても、理解の助けにはならないのである。

上記の例に限らず、宮沢賢治の作品はどう読むのが正しいのか判断が難しい部分を多数含んでいる。その分、個人間で読解力を競うようなテーマには格好と言えるが、その反面、知識・経験がばらばらの読者を相手として、一定の理解・達成を求めるような学校教育には、向いていないと思う。言葉の一つ一つを意識して賢治の作品を読み直してみれば、その難しさは明白であろう。

#### 【参考文献】

三浦修・須田裕・工藤淑子・荒川奈津子・佐々木江美「盛岡市の植物季節VI——花ごよみからみた宮沢賢治作品の植物季節」岩手大学教育学部研究年報 61: 21-44.

# 「なよ竹の」考

— 女性美の源流 —

高桑枝実子  
たかくわえみこ

東京大学大学院博士課程

## 「なよ竹の」のルーツ

『源氏物語』「総合」巻で「物語の出で来はじめの親」と称された『竹取物語』の主人公といえ、<sup>1</sup>「なよ竹のかぐや姫」である。その命名の由来を物語は次のように語る。

—— 竹取の翁が根元の光る竹の中から小さな児を見つけて養育したところ、「かたちの顕証なること世になく、屋の内は暗き所なく光満ち」るほどの美貌へと成長したので、御室戸齋部の秋田という人物を招いて名を付けさせた——。

齋部（忌部）氏は古来、宮廷祭祀を司る氏族である。よって、「なよ竹のかぐや姫」は、何らかの祭祀呪術（卜筮など）によって得られた霊的な名であった可能性がある。

この「なよ竹のかぐや姫」の「かぐや」は、光のきらめ

きを表す上代語「かがよふ」と関わりを持つと考えられるため、「かぐや姫」は光り輝くような美しい姫、というほどの意となるだろう。これと全く同じ「迦具夜比売命」の名が『古事記』垂仁天皇条に見え、允恭天皇条には、体の美しさが衣を通して外に出るほどに美しい「衣通郎女」という女性の名が見えることから、人並み外れた美貌を持つ女性に対して光り輝く様を意味する名を付けるのは、上代以来の伝統であったことが分かる。一方、「なよ竹の」は、「しなやかな竹のように美しい」の意で、かぐや姫が竹から生まれたことによる命名と説明されることが多い。しかし、そう単純に片付けて良い問題とは思われない。「なよ竹の」という表現は『竹取物語』が初出ではなく、既に『万葉集』の歌に詠み込まれていたからである。

## 人麻呂と「悲劇の采女」

『万葉集』で初めて「なよ竹の」の表現を用いたのは、持統・文武朝（六九〇～七〇七年頃）に活躍した宮廷歌人、柿本人麻呂である。人麻呂は「なよ竹の」を、吉備津采女という女性の美貌を讃美する表現として用いている。

秋山の したへる妹<sup>いも</sup> なよ竹の とをよる児<sup>こ</sup>らは：

（巻二・二一七）

右は、「秋山の紅葉のように、赤く美しい乙女、しなやかな竹のように、たおやかなあの娘は……」というほどの意。表現を詳しく見ると、まず冒頭の枕詞「秋山の」が冠する「したふ」は赤く照り映える意の動詞であり、赤い乙女というの一般的な、中国で佳人を表す「紅顔」の語と同じで、血色が良く肌が赤色に染まった若々しい女性の様を表すと説明される。しかし、単にそれだけの意味ではない。古代の赤は、靈威に満ち溢れた状態を意味する色と考えられた。よって、「したへる妹」＝赤い乙女という表現は、霊的な美質を備えた女性への讃辞なのである。

一方、問題となる「なよ竹の」は、ここでは「とをよる児ら」に掛かる枕詞となっている。「とをよる」の「とを」は「撓む」の「タワ」の母音交替形で、「とをよる」とは外部からの力を受けてしなやかに曲がることを意味する。

よって、「とをよる児ら」は、しなやかな竹のように撓みしなう女性を表す。上代の美的観念では、男女を問わず、しなやかな立ち姿が優美で理想的なものとされた。飛鳥・奈良時代に造られた仏像のしなやかな曲線美が、これに近いだろう。吉備津采女の場合も、しなやかで優美な立ち姿が讃美の対象とされたのである。

ところで、この吉備津采女は何者なのかと言うと、吉備国都宇郡（現在の岡山県）出身の采女である。采女とは、各国の郡司階級の姉妹子女の中から若く容姿端麗な者を選んで貢上させ、天皇の食膳への奉仕や宮廷祭祀などの職に充てたもので、天皇以外の男との私通は厳しく禁じられていた。しかし、密通が露見した末に自ら命を絶つ者が少なくなかったようだ。実は、吉備津采女も、そのような悲劇の采女の一人であった。先に例として挙げた讃美表現は、吉備津采女の死を悼む挽歌の冒頭部なのである。

改めてその全文をみることにしよう。

吉備津采女が死にし時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首 并せて短歌

秋山の したへる妹<sup>いも</sup> なよ竹の とをよる児<sup>こ</sup>らは い  
かさまに 思ひ居れか 栲縄の 長き命を 露こそば  
朝に置きて 夕には 消ゆといへ 霧こそば 夕に立

ちて 朝には 失すといへ 梓弓 音聞く我も凡に見  
し こと悔しきを しきたへの 手枕まきて 剣大  
刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫の子は  
さぶしめか 思ひて寝らむ 悔しめか 思ひ恋ふらむ  
時ならず 過ぎにし児らが 朝露のごと 夕霧のごと  
(巻二・二二七)

短歌二首

楽浪の 志賀津の児らが へに云ふ、「志賀の津の児が」  
罷り道の 川瀬の道を 見ればさぶしも  
(巻二・二一八)

そら数ふ 大津の児が 逢ひし日に 凡に見しくは  
今ぞ悔しき (巻二・二一九)

美しい吉備津采女が男(Ⅱ「若草の その夫の子」と密通した末、「川瀬」に入水自殺し、本来であれば「長き命」であったものを、「朝露」「夕霧」のように儚く消えてしまった。「我」は、評判を聞いていた采女にかつて逢った時に、その姿をぼんやりとしか見なかったことを悔やみ、まして密通の相手である男はどれほどの悲嘆であるかと思いやる。ここで「なよ竹の」は、吉備津采女の儚く失われた美貌に対する讚美表現となつてることが分かる。

美しい死者と竹の神性

『万葉集』には、同様の表現がもう一例ある。

なゆ竹の とをよる御子 さにつらふ 我が大君は：  
(巻三・四二〇)

右は、石田王を悼む挽歌の冒頭部である。石田王は男性皇族であること以外は不明の人物だが、「紅顔」を表す「さ」に(さ丹Ⅱ赤)つら(Ⅱ頰)ふの語から、若くして身罷ったと推測される。「なゆ竹の」は「なよ竹の」の交替形で、枕詞として「とをよる御子」に掛かり、しなやかな竹のようになたおやかで女と見紛うばかりに美しい王への讚美表現となつていて、先にみた人麻呂の挽歌とまったく同じ構造であることが分かる。

『万葉集』に「なよ(ゆ)竹の」の語は右の二例しか見えない。つまり、『万葉集』の「なよ(ゆ)竹の」は、挽歌に於いて、若くしてこの世を去った死者の美貌を讚美する表現だったのである。しかし、何故、「なよ(ゆ)竹の」と死者とが結び付いたのだろうか。それは、上代に於ける竹のイメージが関係しているらしい。

竹は、古くから日本に自生し人の生活と深く関わって来た常緑多年生の植物である。植物学的には稲に近い仲間とされるが、その外見は草とも木とも言い難い独特な形状で

あり、幹の内部に節で仕切られた空洞を持つ点や、成長が著しく早い点など、神秘的な特徴を有する。竹の中から黄金や児が見つかり、その児が急激な成長を遂げるという『竹取物語』の展開は、このような竹の神秘性を反映したものであると言えよう。

ただ、上代には、地下茎を伸ばして繁茂する竹の強い生命力の方が注目されていた。例えば、『古事記』歌謡には、天皇の宮殿を誉めた「竹の根の 根足る宮」(竹の根が十分に張るように、土台から頑丈で立派な宮殿)という表現があるし、『日本書紀』歌謡や『万葉集』には、「大宮」「皇子」「舍人」「君」など宮廷関連の語に掛かる「さす竹の」という枕詞が見える。これは、竹の枝や根が伸び広がる様子に生命力の活動を見て、同様に宮廷が繁栄するようにとの祝意をこめた枕詞である。このように、上代の人々は竹を、内部に強い生命力を宿す霊威溢れる植物と考えていた。従って、「なよ竹の」の場合も、美しさの裏側に強い生命力や霊威が意識されていたことになる。

「なよ竹のかぐや姫」の名が示すもの

それでは、「なよ竹」を若くしてこの世を去った死者の讚美表現に用いることは、どのような意味を持つのだろうか。ここで思い起こされるのは、先に見た吉備津采女挽歌

に、儚く消えた采女の姿をぼんやりとしか見なかった「我」の後悔が繰り返し歌われていたことである。この後悔は、采女の真の姿を見抜けなかったことを意味するのではない。霊威を宿す「なよ竹」を若くしてこの世を去った死者の讚美表現に用いることは、おそらく、生前の死者を霊威溢れる神的存在として美化することに繋がっている。つまり、生前の死者を神女が仮にこの世に現れた状態として捉え、その理想的な美貌を讚美することになるのだ。吉備津采女挽歌に於いても、儚く消え失せた采女は、仮にこの世に現れすぐに元の世界へ戻ってしまった神女の姿に重ねられていたのである。

『竹取物語』は天武・持統・文武朝の時代を舞台にしていると見られており、上代文学とは浅からぬ繋がりを持つ。よって、かぐや姫に対する「なよ竹の」形容は、『万葉集』以来の伝統を持つ、この世ならぬ神女の美貌に対する讚美表現と捉えられる。逆に、かぐや姫が「なよ竹の」と形容された時点で既に、間もなくこの世から去り行く彼女の運命が伏線として語られてしまったと言えるのではないか。

『竹取物語』、『源氏物語』、『古事記』、『万葉集』の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠った。

(1) 上田弘一郎『竹と日本人』(NHKブックス 一九七九年三月)  
(2) 下巻・雄略天皇、記歌謡九九

## 活魚 (いけうお・いきうお・かつぎょ) 料理

「活魚料理」は、料理店でよく見かける「お品書き」の表記形ですが、読み方としては「いけうお料理」「いきうお料理」「かつぎょ料理」のどれが最も伝統的かつ標準的でしょうか？

答えから先に言うと、「いけうお料理」が最も伝統的かつ標準的な言い方ということになります。しかし、難読の上に古いという感じがあって、インターネットなどで検索した結果では、一般には（特に、若年層では）、難読感のない、新しい言い方の「いきうお料理」が好まれています。

「かつぎょ料理」は「活け魚」「活き魚」の送りがない「け」「き」を省略した飲食店の看板の表記がそのまま音読されてきたもので、高齢者層には、俗用（あるいは誤用？）の感じがありますが、読みやすいという点で、正統派の「いけうお料理」を圧倒する気配を見せています。正統派は少し肩身が狭い感じです。

「鯛の活作り」などの「活作り」の場合も、事情は「活魚料理」の場合とよく似ていますが、「いけづく

り」「いきづくり」という言い方はあっても、「活」を音読した「カツづくり」（重箱読み）という言い方は行われていません。文体的特徴としては、「いけ作り」が「いけうお料理」と、「いき作り」が「いきうお料理」と並行関係にあります。

鮮魚店の店頭では、「活蟹①」「活海老②」「活貝③」など、「活＋海産物名」の表記もよく見かけます。①は「いけかに」「いきかに」「カツかに」のほか、「かに」の「か」が濁音化した「いけがに」「いきがに」「カツがに」まであって、目がくらみそうです（ネットでは、清音のほうが優勢）。「活魚料理」の場合と同様に、「いけ」↓「いき」↓「カツ」の順で伝統度・標準度が下がり、同じ順序で使用度が上がるようです。②「活海老」も、③「活貝」も、①の「活蟹」の場合とはほぼ同じことが言えるでしょう。なお、「蟹」「貝」を音読した、「活蟹」「活貝」という言い方はありません。

「活魚」「活作り」「活蟹」の「いけ」は、動詞「生

## 鳥飼 浩二

『明鏡国語辞典』編集委員

ける」（文語形は「生く」）の連用形から来たもので、「生け魚」「生け作り」「生け蟹」など、「生く」と書くことができます。「活」の場合もそうですが、送りがなをきちんと付けておけば読み方は一義的に決まってくるわけです。しかしながら看板などの表記では、送りがなを省略して、単純直截に語を提示する傾向が強く、右に見るような難読語が生じたものと思われま

す。成立の古い「生簀」「生蟹」など、「け」の送りがなくとも読み方が安定したものもあります。「生け花」の場合は、「生花」との衝突を避けるために、「生け花」と書くのが穏当でしょう。

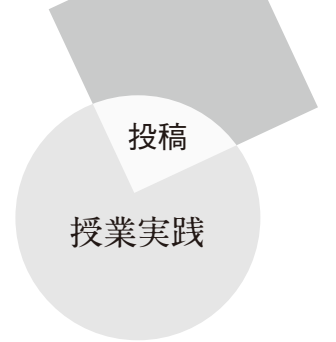
動詞「生ける」は、「生きる」の他動詞形で、（生かしておく）の意。古くは歌舞伎などで、

隣家の企みの様子、聞いたとあれば猶更に、  
生けておかれぬ、小仏小平（鶴屋南北）  
生けておかれず殺らすのだ（河竹黙阿弥）

などと人にも使いましたが、今では「生け簀に鯛を生ける」など、主に食用となる魚類にしか使わないようです。「花を生ける」の場合は、単に生かしておく意ではなく、美的にそうする意に転義しています。さらには、生かしておくために、灰や土に埋める意に転じ、表記も「埋ける」と変わって、それぞれ「火鉢に熾を埋ける」「土中に芋を埋けておく」と使うようになりま

す。なお、「生きとし生けるもの」「生ける屍」などと使う「生ける」は文語動詞「生く」の命令形に完了の文語助動詞「り」の連体形が付いたもので、少し混同しそうな感じもありますが、別語です（生きていう意）。

また、蛇足ながら「英語もフランス語もいける」「酒なら少しはいける」などと使う「いける」は動詞「行く」の可能形からきたもので、これはまったく別系統の語です（上手にできる意）。



投稿

授業実践

# 楽漢的指導案

——親しむための漢語指導

樋口敦士  
狭山ヶ丘高等学校教諭

## 一 文豪の雅号から

文豪・夏目漱石の雅号「漱石」が、『世説新語』などに見られる「漱石枕流」(言い間違えにも強情を張った晋の孫楚の「頑固」の故事)に由来していることは広く紹介されているし、その友人正岡子規は自らを「ホトトギス」にたとえて、その俳号を「子規」としたことも有名である。子規は自らの書齋を「癡祭書屋」と呼んで、書籍を広げている自身の姿を癡が獲物を並べている姿になぞらえている。

純粹な漢語とはいえないが、松尾芭蕉が若い頃に俳号を「桃青」と名乗ったのも、敬愛する盛唐の詩人「李白」の名前をもじ

つたものである(「李(すもも)」に対して「桃」、「白」に対して「青」)。

森鷗外が手記に「小紺珠」という名称を用いているように身近なものに漢語を用いているケースもある。「紺珠」とは、触れると思ひ出すという不思議な珠のことであり、メモ帳の名前としてはとても洒落ているといえよう。

漢語と言えど、「矛盾」、「推敲」、「蛇足」、「杞憂」といった教科書に載るような故事成語と捉えがちであるが、こうした寓話的な世界の言葉ばかりでなく、もつと身の周りにあるシンプルなものを表す「漢語」に触れていくことも、生徒に親近感を抱かせる一つの方法かもしれない。

## 二 歴史に見る漢語

漢語に直接触れていくためには、「漢詩」が何よりも適している。埼玉県西部に位置する本校では、冬の晴れた日には教室からも富士山を眺めることができる。雄峰を拝みながら、次の漢詩を生徒に紹介した。

仙客来遊雲外巔  
神竜棲老洞中淵  
雪如紈素一煙如柄  
白扇倒懸東海天

これは、京都の詩仙堂を建てた文人石川丈山の「富士山」という七言絶句である。

「仙客」が山頂に遊び、「神竜」が洞中に棲む様子、雪は「紈素(練絹)」、立ち昇る煙は柄のようであると詠み上げたうえで、この山はまるで「白扇」をひっくり返した形で東海(日本)の天に聳えていると形容している。

『伊勢物語』では「塩尻」に見立てられた「富士山」も、生徒にとっては「プリン」の形態というイメージが強いようだ。しかし、この漢詩によって、かつての日本人がこの山を「聖域」と見なし、「白扇」を逆さまにしたものと表現している事実を目にした彼らは、「考えたこともなかったので、正直驚いた」と口々に感想を述べていた。

この漢詩を取り上げた目的は、富士山という日本の代名詞においても「漢語」を駆使して表現された世界観を紹介することで、漢詩の偉大さを生徒に理解させることを狙ったものである。因みに富士山は漢語で「富嶽」と言い、「富嶽百景」の名称は葛飾北斎の浮世絵や太宰治の短編小説によって知られている。

その丈山は自身の漢詩集を『(新編)覆醬集』と命名しているが、これは味噌瓶に蓋をする程度の価値しかない自らの作品を卑下したものである。

井伏鱒二の自叙伝に『鶏肋集』がある。これも作品の序文に、「之を存するは恥づべく、棄つるは惜しむべし(鶏肋)」とあり、「鶏肋」とは棄てるには惜しいが取り立てて重要ではないという意味を表している。『覆醬』と同様に自作の謙遜の意味で用いていることがわかる。

江戸時代後期に起きた「蛮社の獄」で弾圧された渡辺崋山や高野長英らが属した「尚歯会」は歴史的に有名なが、これももとは中唐の詩人白居易の故事に由来している。彼は七十四歳の時に仲間を招き、賀寿の宴を催した。ここでの「歯」は年齢を指しているため「尚歯」は「敬老」の意味となる。

日本においても古来より賀寿の管弦詩歌の会がおこなわれ、後世では俳諧や連歌会なども含むようになる。「尚歯会」とは「敬老会」という意味に過ぎず、現在でも老人会の一つとして俳句サークルなどがあるこ

とを思い浮かべると身近に感じられるはずである。

私たちはとくく歴史的事件に目を奪われがちになるが、本来は一般的な名称であったことを知ることでもた言葉への関心も深まるだろう。

## 三 漢語あれこれ

堅苦しくなく、身近なものから生徒の興味を惹いた事例を次にとりあげたい。

「月」を「漢語」で表したものの一つに「玉兔」がある。これは「宝玉の中にいる兔」を意味しており、しつとりとした美しい玉の中に住む兔の伝説が踏まえられている。この説明後、「玉兔」に対して、「太陽」はどうなるかとクイズ形式で発問した。

魃 動物  
玉兔(月) ⇕ 魃 動物  
(太陽)

「玉」のしつとりとした美しさに対して、太陽のキラキラした輝き「金」(魃石)とそこに住むと言われる三本足の「鳥」(動物)から「金鳥」を即答できた生徒はおらず、

動物についてはせいぜい「ライオンかな？」と答える程度であった。それでもこの話を聞いて、「金鳥」、「玉兔」の名称には興味を持った生徒も多い。

他にも、「天体」としては「木火土金水」をそれぞれ「歳星」「熒惑」「鎮星」「太白」「辰星」と称すことや、北極星を指す「北辰」という漢語もある。

旧暦の十二ヶ月も音楽の「十二律」で表されることも押さえておきたい。三月を「姑洗」、六月を「林鐘」、九月を「無射」、十二月を「大呂」と呼びならわすといった具合だ。江戸時代の出版物の日付にはこれらの漢語をしばしば見ることが出来る。

次に、いくつか生徒が関心を持った漢語を挙げる。

白紙「曳白」  
亡父母「考妣」  
ブランコ「鞦韆（秋千）」「半仙戯」  
滝「瀑布」  
赤子の産声「呱呱」  
歳月「白駒」  
人差し指「食指」

「還暦」ということになるわけである。

「干支」というと、生徒達は「子、丑…」という「十二支」の方だけは答えられるのだが、「十干」の方は意識してこなかったため、当然のことながら答えられない。ただ、「十干」はちょうど十年で一巡しているの

で、これを西暦の下一桁に照合させるだけで、簡単に自分の干支が割り出せることがわかった。つまり左の図のようになる。

例えば、現高校三年生の多くは平成六

（一九九四）年の「戌年」生まれであり、西

暦の「四」年は「甲」に当たることから、

彼らの誕生した干支は「甲戌」ということ

が導き出せる。また、「辰年」である今年

（二〇一二年）は、西暦の「二」年なので、

「壬」つまり「壬辰」であることがすぐにわ

庶民「布衣」  
即位「南面」  
おたまじやくし「科斗」

こうした漢語を単発的に紹介するだけでも、やや横文字への憧れが強い生徒にとって漢語が親しみを持って感じられる存在になるはずである。漢語に触れていくことで、漢文への抵抗感をなくす効果においては論を俟たない。

最近では「漢語」よりも「英語」を含めた欧米語を主とした横文字表記を目にするようになった。三十年程前には「流感（流行性感冒）」の名で恐れられた伝染病も今では「インフルエンザ」と呼ばなければ誰にも通じない時代になっている。伝統的な漢語文化に対する意識が希薄化しているように寂しさを覚えずにはいられない。

冗長な言い回しの和語、一部の理解者しか持たない他の外来語に比べると、漢語は簡潔にして且つ意味の類推が可能である点で、我が国ではとても有用な表現方法である。

普段から使用していくことで、漢語の必

これが理解できると、日本史もしくは東洋史の西暦下一桁を容易に換算することができる。例えば、「戊辰戦争」の「戊」は「八」年なので、この戦いが「一八六〇年代」に迫れば「一八六八年」と判断できるし、「辛亥革命」の「辛」が「一」年ということを知って、この事件が明治末期であることに思い至れば、「一九一一年」ということを特定することができる。

この点に着目すれば、他にも「壬申の乱」、「庚午年籍」、「甲子園」、「戊戌の政変」など

和漢の歴史的事件や事物において「干支」が使用されていることがわかるだろう。

古典よりもむしろ歴史の分野に近いのかもしれないが、「干支」に限らずちよつとしたことでも意識を向けることで、さらに古典に対する関心も深まっていくはずであ

要性を再認識できるばかりではなく、楽しみながら言葉を磨いていくことができるはずだ。

#### 四 干支早覚え

覚えておくとき少し役立つ一例を紹介したい。授業において「干支」の暗記方法についても生徒に説明している。「干支」とは、「木火土金水」の五行をもととしており、これにそれぞれ「兄」と「弟」を付けて、「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」という「十干」に「十二支」が組み合わさったものである。

ただし、「二〇×二」ではなく、十干のうちの奇数のもの（つまり、甲、丙、戊、庚、壬）は、十二支の方でも奇数のもの（つまり、子、寅、辰、午、申、戌）としか結びつかないので、「五×六」（にそれぞれ「兄」と「弟」の二通りあることから）「×二」で「六〇通り」ということになる。（十干の一番目「甲」は十二支の一番目の「子」と組み合わせ、「甲子」にはなるが、二番目の「丑」と結びついて「甲丑」とはならない。）これが一巡すると（六十年経つと）

る。

古典離れという現状があるにせよ、高等学校の学習指導要領では、文語体の近代作品も必要な場合は取り扱うように記されており、古典教育が国語全体の中で比重を増しつつある。漢文素材は、教訓や箴言といった堅苦しい側面ばかりでなく、実は日本人に親しまれつつ受容され、積極的に活用された歴史を持っている。食わず嫌いの生徒達にとって身近なものに捉えさせる方法を考えながら、漢文を受け身の姿勢で学ぶのではなく、日々の生活の中で積極的に活用できるような授業展開を考えつつ実践している。

孔子は「之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず」（『論語』）と言って、物事の上達においては「好み楽しむ」ことがその捷径であることを説いている。苦手意識が強い生徒達にとつて、漢語に親しませることが古典離れをくいとめる解決策の一つになると考えている。

|         |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （十干）    | 甲 | 乙 | 丙 | 丁 | 戊 | 己 | 庚 | 辛 | 壬 | 癸 |
| （西暦下一桁） | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 〇 | 一 | 二 | 三 |

島田康行 著

## 「書ける」大学生に育てる ― A O入試現場からの提言



四六判・並製・二〇八頁  
定価一七八五円（本体一七〇〇円）

評者＝北川すみれ  
東京都立西高等学校教諭

話題になった「分数ができない大学生」同様、大学生の読み書き能力の低下も危惧されている。「書ける」大学生に育てる」には、「書けない」大学生の実態を改善する著者の希望と意志が表されている。

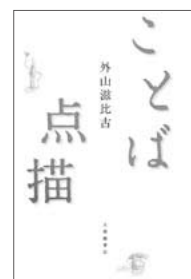
大学生の高校生活での「書く」経験の実態等を述べた上で、大学入試「小論文」の変遷と限界、「小論文」は「自分の考え」ではなく「与えられた課題」について論じるにすぎないことを指摘する。「小論文模試」を実施する出版社にインタビューし、「書

く」力をつける模索から協同をも提起する。一方、A O入試の「志望理由書」は受験生が自己と向き合う学習材となる可能性を指摘する。新しい高校教育課程の理念と大学教育の中で言語活動を通して育成される力とを見据え、アドミッションセンター勤務の著者は、高大接続の問題を考え、大学入試「国語」は変わるべき時が来ているという。

この提言を真摯に受け止めた。各種の調査・分析を踏まえた本書は、国語教育に携わる者として必読の書である。

外山滋比古 著

## ことば点描



四六判・並製・一七八頁  
定価一四七〇円（本体一四〇〇円）

評者＝大井悟

「地理的言語」「第四人称・第五人称」……。目次を眺めて……と感ずる方も多いだろう。だが、そこは手練れのエッセイスト。読み始めればたちまち、名調子に引き込まれる。

我々とはすると、「本来の意味は」「語源は」などと、「歴史的」視点で言葉を語りがちだ。だが、「地理的」に考えることで、新たな視野が開けないか。本歌取りの伝統など「歴史的」な文学風土に、「地理的」視点を導入したのが、諸国を歩いた芭蕉ではないか。なるほど。

このような具合に、著者が言葉について考えたことあれこれ綴った、書き下ろしエッセイ集である。この「書き下ろし」という概念のユニークさ、などという話題もあって面白い。締めは、「通信革命」。ケイタイに代表されるコミュニケーションの変化の本質を、第一人称文化から第二人称文化への転換の萌芽とみる。

昨年喜寿を迎えてなお、毎朝皇居周辺を散策しながら思索を重ねる著者。そのアンテナは、鋭敏に時代を捉えている。

遠藤織枝 著

## 昭和が生んだ日本語



四六判・並製・二二六頁  
定価一五七五円（本体一五〇〇円）

評者＝品川樹

戦前戦中の庶民のことば

ロンドン五輪で惜しくも銀メダルに終わった女子サッカー「なでしこジャパン」。そのチーム名の元になった「大和撫子」は、心の強さと清楚な美しさを備えた日本人女性の美称です。ところがなんと、戦前までの新聞には男性の「大和撫子」が。さらに驚くべきことに、海外の日本人売春婦を指したことも。それが戦時中、日本を美化する風潮の中で、強くて美しい日本女性という意味が大勢を占めていきます。戦争が言葉の意味を決定づけたのです。

このほかにも、外来語「ヘリコプター」「ショーウィンドウ」が戦時中に定着したとか、現在のネイルアーティストの元祖が「美爪師」と呼ばれたとか、興味を誘う話題が盛りだくさん。今や使われなくなった端正な話し言葉、大仰で絢爛豪華な漢文調の広告コピーや皇室敬語などを見ると、昭和の初めという「ちよつと昔」と現代日本との距離を考えさせられます。「戦後」という時代の節を経て、今につながる言葉と、消えてしまった言葉を見つめる一冊。

星幸広 著

## 学校リーダーシップ養成講座



四六判・並製・一八四頁  
定価一五七五円（本体一五〇〇円）

評者＝永福進

筆者は元警察官の学校危機管理のスペシャリスト。先日行われた講演ではいじめ問題に触れて「隠蔽は最悪の選択肢である」と力説していた。いじめだけではない。災害対策にせよ、保護者対応にせよ、学校の対応はその場しのぎで蓄積がない、だから同じ過ちを繰り返すのだ。どうすればよいのか。筆者はリーダーシップによって学校が組織として強くなること、また日頃のロールプレイによる訓練と、実践に即したマニュアルの作成が危機管理の要という。

加えて学校の守備範囲を明確にし、学校だけで問題を抱えずに、法的な考え方を積極的に導入することも提案している。例えば非常識な保護者には、警察の介入も辞さないという毅然とした態度を表明するだけでも抑止効果があるそうだ。学級経営や保護者対応でお悩みの先生にはぜひ読んでいただきたい。たくさんの実例があげられているので、解決への糸口がきつと見つかるはずだ。巻末の筆者からのメッセージ集にも大いに励まされる。

こんなに使える！

# 大修館の国語・漢和辞典シリーズ

明鏡国語辞典 第二版



新漢語林 第二版



大修館 全訳古語辞典



古語林



大修館の辞典は、どれも使いやすさを一番に考え、たくさんの工夫を盛り込んでつくられています。学習に最適であるのはもちろん、「読む」「書く」「調べる」などいろいろな場面で「使える」、その特色の一部をご紹介します。

※本文中、**明鏡**は明鏡国語辞典第二版、**新漢語林**は新漢語林第二版、**全訳古語**は大修館全訳古語辞典、**古語林**は古語林を指します。

# 読むときに使える！

## 明鏡

★現代文の教科書でもおなじみの名作のことばを多数収録。  
難しいことばが多い作品を読むときの助けになります。

### 羅生門

とうとう「洞・洞」「形動」きびしくて穴があいたようなさま。また、暗くて奥深いさま。「外には、ただ、黒い」たる夜があるばかりである芥川」

### 山月記

しょうこく「峭刻」きびしくて残忍なさま。「その容貌も」なり（中島敦）

### 舞姫

ざんぶ「譏・諷」〔名・他サ変〕〔文〕事実ではないことを言い立ててそれのこと。「他人を」する「彼人々」は余を猜疑し、又遂に余を「するに至りぬ（海外）」

つばら「委曲・詳ら」〔形動〕〔古くわしいさま。つまひらか。「余がかれに隠したる願末」を「知りて（海外）」

### 心づから

こうじょうしん「向上心」〔名〕よりよい方向を目指し自らを高めようとする心。「」の「ない人」精神的に「」の「ないものは馬鹿だ（源行）」

## 全訳古語 古語林

★重要な例文を「看板」囲みで示した代表例）で多数収録しています。学習に役立つポイント欄も充実。  
（例は『全訳古語』より）

### なかなか

髪（かみ）のうつくしげにそかれたる末も、なかなか長きよりもよなう今めかしきものかな「髪（かみ）がきれいに切りそろえられている端（は）も、かえって長いのも、格別に現代風で美しいものだ」  
（源氏若菜）

「（前）なまじっか。中途半端に、（例）なかなかほのかにて、かく急ぎ渡り給ふを、いと飽かず口惜しくぞおぼされける」「玉鬘（たまむす）が、なまじっかちよと顔を出してこんなにすぐ帰られるのを、（源氏は）まったく満ち足りず残念にお思いになった」  
（源氏若菜）

### 看板

（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

## 新漢語林

★高校教科書の漢文教材から、用例を豊富に収録。  
すべての用例に返り点・読み・現代語訳がついて、わかりやすい！

### 破

（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

### 濺

（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

漢詩は二句ずつ収録して鑑賞に便利。  
杜甫の「春望」のように、詩の語句を引いていくと全句読めるものも！

【家書】①その家に伝わる書翰。②家族からの手紙。  
（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

【不勝簪】①髪を留める簪がきれいなさま。②（例）  
（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

有名な句は、そのまま熟語として立項

（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

伝奇小説『人虎伝』など、多様なジャンルの教材から用例を採取

（例）「（前）なまじっか。中途半端に、なまじっか、の意の副詞から、中途半端な状態から抜け出すという意で（例）の、いっそ、かえって、の意に発展した。平安時代には（例）の用法が多い。」「（例）は現代語とはほぼ同じだが、これは室町時代以降の用法で、平安時代にこの意味に用いることはない。」

# 書くときに使える！

## 明鏡

★語法表現などの欄で、ことばの使い方を詳しく解説。文章を書くときに迷いがちな、ことばの使い分けやニュアンスの違いなども手に取るようにわかります。

「確率」って、高い？ 大きい？ 多い？

かくりつ【確率】(名) ある事象が起こり得る可能性の度合い。また、それを数値で表したもののプロバビリティ。「成功する」が高い「感染の」は低い。「八分の三(〇・三七五)」の「確率」には「高い」「大きい」「小さい」「多い」「少ない」などの程度表現があるが、右の用例のように「高低」が最も一般的

少なそう？ 少なさそう？

すくない【少ない】(形) 量が基準よりも小さいさま。あまり多くない。①ものの数や量が小さい。少しだ。わずかだ。この学校のバレー部は三年生より二年生(の)数が「この会社は休みが」「この川は水量が」「外国に行った回数は」「予算を」「見積もる」②全体に占める割合や度合いが小さい。「水分が」「賛成よりは反対が」「頻度や確率などが小さい。まただ。この地方は冬に霜が降りることは」「成功する可能性は」「小さい・低い」③年が下である。年少だ。「年は五つも」が親父だ。④多い【多】「少ない」「寡ない」とも。語法後に「そうだ」「すぎる」が続くときは、「少なそうだ」「少なすぎる」が標準的。「少なさそうだ」「少なさすぎる」は誤り。派生：け／さ

# 興味が広がる！

## 明鏡

★「このことばは間違いない」「このことばの使い分けは？」など、ことばについて気になったら別冊索引の出番。さつと調べられて辞書本文へもスムーズにたどり着けるので、ふと気になったことを調べるくせがつき、ことばへの興味も広がります。

めぐる一ません  
ま  
参る  
「行く」「来る」の丁寧語 参る 二① 1630  
丁寧な物言いをして相手(＝聞き手・読み手)に改まった気持ちを表す 参る 二① 連語 1 1630  
「出張で大阪へ参ります」——高めの人物が、ない場合も「参る」は使える 参る 二① 連語 2 1630  
×「参られますか」「参る」を尊敬語のように使うのは誤り 参る 二③ 連語 1630  
「参拝する」の意のときは「参られる」「参りになる」など尊敬語化も行われる 参る 二④ 連語 1630  
「……て行く」「……て来る」の丁寧語 参る 三① 1630

うかがうーうる  
うかがう  
×「関心の高さが伺える」——「伺う」と「窺(うかが)う」の混同 伺う 語彙 152  
うがった  
×「あまりにうがやれ」うがやれ  
雨季  
「雨季」と「雨季」  
「受け入れ」  
「受入金・受入れ」「受け入れ」  
「受け付け」  
「受付窓口」「受け付け」  
「受け取り」  
「受取証」「取り」  
「後」ろ手  
注意したい「後

## 新漢語林

★筆順に迷ったら筆順欄で確認！ 広く用いられる筆順が複数ある場合には、並べて示しています。使いわけ欄では、主に同訓異義語について、日常のことばの使い方がわかります。

縦・横、どっちが先？  
「乗」の筆順は意外と難しい！

【乗】  
筆順  
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

【上】  
筆順  
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

【丸・円】  
筆順  
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

同訓の語のほか、「及び」「並びに」など、似たことばの使いわけも！

【及び並びに】  
筆順  
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

## 新漢語林

★四六項目のコラムでは、漢字・漢文の基礎知識から中国の歴史、都市の案内まで、幅広い情報を提供。図や写真を駆使したわかりやすい解説で、楽しく学べます。

| 十二月の別名 | 漢名    | 別名        |
|--------|-------|-----------|
| 一月     | 孟春・上春 | 元月・元月・大寒月 |
| 二月     | 仲春    | 令月・令月・春分月 |
| 三月     | 季春・桃月 | 春月・春月・春分月 |
| 四月     | 孟夏・初夏 | 夏月・夏月・立夏月 |
| 五月     | 仲夏    | 夏月・夏月・夏至月 |
| 六月     | 季夏・盛夏 | 夏月・夏月・夏至月 |
| 七月     | 孟秋・初秋 | 秋月・秋月・立秋月 |
| 八月     | 仲秋・正秋 | 秋月・秋月・秋分月 |
| 九月     | 季秋・晩秋 | 秋月・秋月・秋分月 |
| 十月     | 孟冬・初冬 | 冬月・冬月・立冬月 |
| 十一月    | 仲冬    | 冬月・冬月・冬至月 |
| 十二月    | 季冬・終冬 | 冬月・冬月・冬至月 |





# 使える4冊がそろえば、 国語はばっちり！



全訳用例とわかりやすい助字解説で、  
漢文学習に最適！

## 新漢語林 第二版

鎌田正、米山寅太郎 著  
B6判・1952頁  
定価3045円(本体2900円+税)



詳しい解説と別冊索引で、  
日本語の疑問を解決！

## 明鏡国語辞典 第二版

北原保雄 編  
B6変型判・1954頁+別冊96頁  
定価3045円(本体2900円+税)



収録語数が多く、  
事典も充実の古語辞典

## 古語林

林巨樹、安藤千鶴子 編  
B6判・1638頁  
定価2835円(本体2700円+税)



学習に最適な、  
全訳タイプの古語辞典

## 大修館 全訳古語辞典

林巨樹、安藤千鶴子 編  
B6判・1122頁  
定価2100円(本体2000円+税)

※定価は税込(2012年9月現在)